
魔王と勇者の契約

弥月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と勇者の契約

【Zコード】

Z0161M

【作者名】

弥月

【あらすじ】

出会った魔王は子供でしかもそれが呪いのせいとか！！
倒しにきた勇者の立場なのに呪いとく協力って……。
しかも出会う住人も変わった人達ばかり！！
もう突っ込む僕の身にもなってくれ……。

1話 出会い

「これが魔王?」

出会った瞬間に緊張感が一気に吹き飛んだ。
逆に驚きを隠せず声が裏返る程だ。

だつて……

まだ子供じゃん!!

思い切り叫びたいのを押さえつつ、見つめてしまつ。

漆黒の髪が艶やかに輝き、濃い藍色瞳は勇者つていうか僕を睨み付けている。

子供特有のふっくら頬っぺたが印象的だけど……。

睨んでも全然怖くないし、寧ろ可愛い部類に入る方だなと思つてしまつ。

「おい、勇者。貴様まさか!! 可愛いなどと思つてないだろ? な?」

ずっと見つめたのが、魔王にとつて不快に思えたのだろう。
子供らしかなぬ眉間にシワを作り魔王は嫌々うつむいていたが、そんなこと僕は気にせず

「思つてるけど。君、本当に魔王なの?」

「ぶつ無礼な! そつそれに君言つな!! これでもれつきとした魔王
なんだ!! ……ひう呪いたせなければ」

「呪い？」

呆然としてしまったつてそうだろう。

とこうか開いた口が塞がらないとでも言つたか……。

魔物一強くて賢く、人間にとつて最大の敵が”魔王”つて誰しも思うから。

でも実際は子供だし、尚且つ呪いにかかっているなどと書つのだから……。

本当に”魔王”かも疑いたくなる。

僕の心情を感じたのか魔王は吐き捨てるよひに言つ

「うつ 疑つてゐるだろ！！分かるんだかなり……貴様の田語つてゐる

今にも泣きそうな面だ。

「別に信じなくともいいが……」

「信じるよ。

立派そうな椅子に座つてゐるし」

「そこかよーー！」

笑顔で言つてみたが、予想以上に反応が返つてきた。

面白い。

ついつい弄りたくなりさらに「それに大きくなれば魔王ぽい威厳付きそだしね」って僕は言つてみた。

「ほいってなんだー？！？ほいってーーそれにやつぱり信用してないじやないかー！」

次々に勢いよく突つ込む魔王は顔を真っ赤にして反論していく。

必死な姿がまた可愛い。

ああ、僕はこんな魔王を本当に倒さなければいけないだろ？

無害そうな魔王を……

2話 実は…

思つてはいけない事を考えてしまつた。

だつて相手は魔王だ。

例え見た目が可愛らしく、

怒つたときに頬つべたが真つ赤に染まつて、
これまたプリティーでもつて変態か！？僕は…！

このままではいけない。

気持ちが落ち着かないのがはつきりわかるし、
だから出来るだけ平常心を装いつとしたとき。

「勇者。大丈夫か？」

「へつ？」

「だから気は確かにと聞いている」

さつき真つ赤に染めた頬つべたの赤みは薄い紅色に落ちつさ。
魔王も冷静さを取り戻しているように見える。

「えつまあ……大丈夫です」

倒さなきやいけない相手なのに心配された……。

どんな話だよ！内心ツツコミを入れたが。

「勇者の事は噂で聞いてはいたがまさか女性だとは思つてなくてな

「何で！？！？知つて！！」

驚いた。勇者であつても女つてだけで人の態度は違つた。
だから常に男装してたのに。

こんな簡単に見た目だけで判断出来るほどほんとは出でないはず。
仲間の魔法師や剣士が旅を一緒にして、
数週間気付かれないほどの徹底して完璧に化けていたはずだつた。

魔王は気にせず淡々と、

「ああ、オーラで性別何てわかるからな」

「そつか！？！てええ！？」

「だが勿体ないな。瞳は綺麗な深緑だし、肌は白いし、
その朱髪は伸ばしたらきっと可愛らしくお嬢さんなのにな」

「つ！？」

思わず大分短い髪を手で押さえた。

今までそんなこと言つてくれる人には出会わなかつたし、
似合わないとつたから尚更驚いた。
頬に熱を感じる。

「なつ！ナニ言つて！？」

「そつですよ！？！何口説いてるんですか魔王様」

「あつノア」

突然現れた美男子さん……。

本当カーテンの裏から出てきたのつかつて位今までドロに居たのか……。

「あの……どちら様でしょうか？」の美男子さん。

「それは……追々話す」

銀髪の長い髪が腰まであり尖った耳は魔族の証なので考へてきつと側近だろうが。

魔族にしては珍しい白いロープを来ており、落ち着いた大人の気配を感じた。

「 もう一ちゃんと色々説明してあげないと解けるませんよ。」の呪いは

「ノア。これから説明しようとしてたんだ」

「そんなふうには見えませんでしたよ。

むしろ敵である勇者さん口説いていたふうにしか見えませんでした」

銀髪の美男子は淡々と言っている。が魔王を確實に責めている。

魔王はため息を吐いて

「俺がいつ口説いてた？」

「今さつきです。

普通勇者に対して可愛いだの言つ魔王は
見たことも聞いたこともありませんよー」

「ノア。……いつから見ていた」

険しい顔の魔王は銀髪の美男子を見つめ。その見つめられて当人は頬に指をあて最大級の笑みで、「『これが魔王』って言っていたところからですかね。その影から覗いてました」と輝いた目で答えていた。

「あれほど覗きは禁止つて言つたじやないか！？」

「だつて魔王様可愛いだもん！－見守るくらい、いいじやないですか」

「見守つてんじやねえ－－－！」

座っていた真っ赤な椅子から立つて魔王が怒鳴つた。

「怒つた顔も可愛いんだから」

「黙れ」

「……あのそろそろいいですか？」

「「あつ」」

その反応は……

忘れてましたよね？

完全忘れられてましたよね！－！

僕は軽くため息を吐いて

「魔王。呪いの事聞きたい。何がなんだかサッパリだから」

魔王は「ああ」と頷き勇者を見つめて

「ある一行のやつらに見た田を子供にされたんだ」

藍色の瞳が悲しげに語っていた。

2話 実は…（後書き）

長く書い「つと心がけてるんですけど…
短いですね（^ - ^ - ）

次はやつと理由を書けるので暴れられねばず

今度は勇者ツツ ノリ…予定ですw

静まり返った部屋。

大きなカーテンの隙間から月明かりが僅かだが差し込んで魔王を照らし、月明かりが悲しげな笑みを更に儂く見せる。

さつきまであんなに騒いでいたのに。

主に美男子と魔王だけど……

魔王が浮かべていた柔らかな笑みが苦笑に変わり

「ははあ……これでも私は26なのに。もうこの姿は10年も変わらない」

「……」

だから見た目が子供。なるほどうつむかと納得した。でも自分より9歳も上なのだ。なんか聞いていて悲しくなつてきた。

「でも26つて信じられない……」

「信じられなくても本当だ。私だってこんな嘘だと思いたい」

魔王は片方の腕をもう片方で包み、黒ローブの袖にシワがつくぐらいきつく摘んだ。

表情は相変わらず苦しそう。だがその表情は子供がするものとは思

えない、

大人がするものだきっと……

「でも」のままでも魔王様十分可愛いんですけどね」

「ノア……」

この場の雰囲気を読まず、淡々という美男子さんあんた凄いよつと僕は別の意味で感心してしまう。
美男子さんを睨み付けてる魔王もたえない苦労な事だと涙が出そうだ。

「”魔王”は別に可愛いとか必要ないだろ……」

「まあそりですが、でも可愛い方が私にとつて田の保養ですし」

「田の保養！男に使う言葉じゃないだろ……」

ノアも男なんだから！」

美男子さんはふふっと笑つて魔王に近づき軽く頭を下げた。

「お言葉ですが、私は魔王様が大好きなので男とか女とか関係ありません」

すっと顔を上げて輝く笑顔で

「”魔王”に従つてゐる訳ではなく”貴方様”だから使つてゐるの
ですか」「

「……そつそつか」

はいと頷く美男子さんは何だか嬉しそうに微笑んでいる。

なんか美男子さんが勝った感じ……

うんつまらん。

魔王頑張ってくれと心中で応援した。

「といひでちやんと呪いをかけた相手を教えないといいんですか？」

魔王様

「お前が言つな……」

呆れた声が響く。

なんの事かさつぱりですと云ひよつた態度の美男子さんに魔王も頭を抱えてくるようだ。

恐るべし……

でも何だかんだ、この雰囲気になれてくつわせはじめている僕も怖い。

だつてこの魔王だし。ねえ。

「勇者……。話を戻そう」

ため息を吐き、魔王は座り直す。

「呪いをかけた相手は10年前の勇者一行だ」

「ちよつちよつ……へつ？」

「……今何て？勇者一行？」

真剣な顔で語られた事が頭を真っ白にさせた。

深緑の瞳が見開き、驚きを隠せなかつた。

「勇者ひやんと聞いてるか？」

魔王の声で我に返つた。

危ない危ない。

気を取り直して答える。

「うん。大丈夫」

「……話を続けるぞ。

勇者一行つて言つてもその仲間の魔術師だ」

「えつでも魔王が勝つたんじょ。なんで呪いなんか……」

疑問しか浮かんでこない。

魔王に挑んだ”勇者”はこれまで誰一人帰つて来たものはいなかつた。

そんな魔王が魔術師」ときに呪いなんてかかつてしまつだらうか……

「そう急ぐな。確かに一戦交えて勝つた。

これでも私は殺さない主義だ。それに……」

「えつ！！横暴非道で血も涙もない魔界の王。”魔王”なんじやないのー？」

驚きを隠せず思わず叫ぶ感じに言つてしまつた。

魔王の言葉を遮つて……

魔王は気にせず、淡々とめんどくわさうに話す。

「魔王が誰しもやうとは限らないだろ？」

第一殺しはめんどくさい」

死体なんて真つ平」めん何て言つよつて、眉にシワを寄せ首を振る。

「嘘だ……」

思わず叫んでしまった。

だって益々信じられないから。

じゃ今までの魔王のイメージを覆すことになる。

でもそれは認められない。

いや認めたくないが正しいかも……。

でも魔王は真剣な眼差しで僕を見つめる。

「嘘じやない

「……」

それでも心の奥では思つてしまつ。

だつて実際に被害にあつた所を数知れず見てきたのだ。

それも酷いものだつた。

だからハイそうですかと素直に信じるわけがない。

僕は鞄に手をかける。何時でも剣を構えられるよつて。

魔王もその行動の意図に気が付いたのか、
更にシワを深く刻み勇者に歩み寄る。

「勇者。ちゃんと話を聞けまだ終わつてない

わつきまで可愛いと言つ葉似合つ彼だつたのに、

今はその言葉より凜々しいがピッタリとはまる。
何より霸氣を感じる。

子供でも魔王は”魔王”って事だと思い知らされた。

どんどん距離が詰められて行く。
思わず後ろに下がろうとしたが体が動かない。
あつ時の魔法か！！
見とれている場合ではなかつた。
額に汗が浮かぶ。

「大丈夫。
何もしない。だからちゃんと聞け」

もう距離はないが身長差は否めない。
丁度腹に頭がくるし、上目遣いで話していく。
凜々しいんだか可愛いんだかとにかく脳内はパニックだ！

「人間界に被害をもたらす奴らは反乱軍だ。
俺の考えがまず気に食わんらしい。
そしてこの呪いをかけた魔術師と勇者は生きている」

強い眼差しで語られ藍色の瞳が真実だと告げてくるよつた氣にさせられた。

その強さは更に光を増す。

「勇者。お前が考えていることは偽りの魔王だ。
だから不安に思つてることも何も心配することはない」

真剣なピリツとした空氣だつたのに落ち着かせるよつた優しい雰囲
気に変わつた。

魔王は僕に抱きついてきて笑顔で。

「勇者契約しよう。この呪いを解いてくれた暁には守ることを約束しよう。」

今は大変な状況になつて戸惑つて いる勇者です。

「何故かって今……魔王に抱きつかれてますもんね」

ט' ע' נ' ע' ט'

人の心読むな!!

動けないままの悲痛な僕の叫び

美男子さんがさつ 今まで黙つてたのに急に発言したよ。おい！

いや、僕と魔王の会話を傍観者側で回していくらしい。

その笑顔がムカつきます。

魔王は魔王で抱きついたままだし。

れ
つ
て
！
！

待つて僕。

そんな母性は求めてないぞ僕は！！

恥ずかしさで悶えるものの、

石のよう¹にピクリとも動かないこの体がなんとも煩わしい。

だからと言つて解くのも無理。何たつて魔法は大苦手だから、簡単なものしかできない自分が憎い。

「魔王様こいつまでこいつしてゐつもりですか？」

「魔王様こいつまでこいつしてゐつもりですか？」

「流石に見かねたのか、魔王に話しかけた美男子さん。いや多分見飽きたんだろう。

「え？」

「何ですかその返事は！？アレですか！？抱き心地がいいからですか！？」

「はあっ……お前なに言つて」

「やつなんですね！？なんて破廉恥な……！？
そんな風に育てた覚えは有りませんよ！？」

「ちょっと……美男子さん主張変わつてしませんか？
この状況を助けてくれるんじやないの！？」

呆れながら美男子を見るが、確實からかつていふよつだ。
うん、哀れ……

魔王も流石に離れて、低めの声で美男子さんと言つて。

「そんな風に言つるのは誤解を生むからやめろ。
それにお前に育ててもらつた覚えはない」

「いやいや……

何の誤解を生むと言つんですか」

わづきの育て件は無視ですか！？

寧ろ否定されてるのに気にしないってどんだけタフなんだよこの人は……

魔王はふつと笑つて

「だつてこれ初級の魔法だよ。多少の魔法が使えればすぐ解けるのに」

「へえっ？」

美男子さんが明らかに変な声を出した。

勇者がまず魔法が苦手で誰も思わないだらうし。

えつじや……

この状況を招いてるのは僕の力不足のせいかな……。
とりあえず、うる覚えの呪文を心の中で唱えてみる。
自信はないけど……。

『汝、時間の使者よ。

我的時間を元に戻せ契約のもと主が命じる。

タイム・time・』

スッと肩が軽くなつた。

鞘にかけていた手を伸ばして解す。

「解けた」

意図も簡単に……

何やつてたんだろ。

魔王は当然と言ひよいな態度で美男子さんと言ひへ。

「言つたとおりだろノア」

「ですね……。

えつと魔者さんがバカだつたですね」

哀れんだ田で言われた。

こんな事知つたこつちない。

僕は眉を寄せて呆れただろう彼を睨み。

「美男子さんには言われたくないです」

「まあいいですけど子供に言われても痛くも痒くもないですから」

屈指のない笑み。

やつぱり好きになれない。

いや、敵だから好きにならなくていいんだけど……

「ああ勇者さん。ノアと呼んでください。

美男子さんと呼ぶのは恥ずかしいですからやめて下さいね」

「はあ？」

「ノアですよ。本名はノア・アークスですけど」

急に自己紹介されてしまった。

美男：じゃなかつた。

ノアについては別に興味ないだけ……。

関係なからう魔王までもぐいっと腕で引き寄せ

「因みに魔王様はカノン・D・ローション様ですよ」

「お前やめろつて……ベタベタひつづくな。後勝手に自己紹介すんな！」

ああ相当嫌がつてますよ。

えつとカノン……

なんか見てる限りノアの方が魔王に見えてくる。

ああ性格的に迷惑なところが特にね。

ノアは構わず頬を膨らまし、

「だつて今言わないでいつ言うんですか？」

「うつ……。でつでもそれは後でもいいだろ！？」

それに詳しい説明もしなきゃいけないだ！

いいから離せ！……」

「……仕方ないですね」

必死に逃げようしてた魔王を渋々ノアは離した。

魔王は素早くノアから距離を置く。

「はあ……。じゃ話を元に戻すぞ」

「うん」

乱れていた息を整えて

「魔術師にかけられたとこり今までだつたよな」

「うん。生きてるとこりまで聞いた」

「ああ。こつもは勇者一行を氣絶まで追い込んで移動魔法で送るんだが……」

漆黒の長い髪を指でいじり始める。
どうやら話しあひこつだ。

「……その。不覚にも魔法の詠唱中にかけられたんだ」

「はあ？」

「だからジジを踏んだだつて」

魔王はわざわざ赤みが収まっていた頬がまた赤みを帯びていた。

「これを解けるのは勇者しかいないんだ」

「確かにそうなんですねー」

「ちょっと待つて一人ともーー」

僕はそんなに魔法は得意じゃない。

寧ろ大の苦手なんだ！

第一に理由が解らない

いきなりの事で頭がパニックになる。つて本日何度目だろ？……

大きく首を横に振つて無理無理と言つても、魔王は譲りうず。
真剣に話す。

「お前しか解けないだ。

だから頼む」

「もう……。
なんで僕なんだよ……。
わかったよ！！
やればいいんでしょう！！やれば！！
解いてみせようじゃないか！」

そんな強い眼差しで見つめられ続けられるほど、
僕の心は強くない。

仕方なく引き受けたが、確かに抱かれたときに『勇者契約しよう』
の呪いを解いた暁にはお前を守ろうって言われたことも気になる。

覚悟を決めて。

「まだ名前言つてなかつたよね。

僕はアンジュレッタ・ガーネット。

本名で呼ばれるのは好きじゃないからアッシュで呼んで

手を魔王の前に差し出して

「解けるかどうか解らないけど……。
これからよろしく

「ああ

魔王は差し出された手を掴み。
強く握り返した。

ノアは客室への案内人として勇者と共に来ていた。

廊下は薄暗いがそれほど暗くはない、
落ち着いた内装をしていた。

初夏に入りはじめた季節にしては暑くはなく寧ろ、
ややひんやりとして心地よいくらい。

ノアが一室の前で足が止まる。

「リリが勇者の仮の部屋ですよ」

「リリ。えつ仮？」

ドアノブを回し開けるとノアはええと頷き。

「リリは客室なんで、ちゃんとした部屋が調つまではリリがお過
りしてわいね」

ノアは微笑み、

勇者を部屋の中へ招かれる。

青ベースのシンプルな作り。

窓からは円明かりが差し込んでいる。

壁沿いに小さな化粧台がある。

向かい側にはちょっと大きめなベットが2台、

その間には小さな台灯ランタン（オイルランプ）が灯されてゐる。

「こゝが魔王城の中だと言われない限りどこにでもありそうな宿屋の一部屋だ。

「ノア。 一つ聞いていい？」

勇者はこゝの部屋を見て一つの違和感に気付いた。

「何でしきり？」

の声が聞こえた。

ノアはドアを閉めて勇者の隣に立つた。

「照明つてこゝのワントンだけ？」

「はい。 セットですがどうしました？」

「もしかして……

電気が通つてないとか言わないよね？」

首を傾げ腕を組む。

サラツと銀髪が流れ輝く。

「……”電気”つて何でしきりか？」

「……」

えつ？えつと……

聞き間違えかな？

いやいやまさかーと、心で否定した。

「だから”電気”だよ」

「ですから”電氣”って何でしょうか？」

さよとんとした表情で言われてしたまつた。

「マジで！？ だつて”電氣”だよ知らないはずなつ……！」

ほりとしてランタンを見てしまふ。

ノアは首を傾げたまま辯て立つてゐる。

思わず膝をつきそうになる。

もう二度とならんから膝をついて床を叩きたいくらいだ。

こっち（人間界）じゃ当たり前のように使つてゐるのに！――！
あり得ないだろ――――！

「電気知らないとか嘘だと言つて！…」

「はい。嘘ですよ」

「……はあ？」

えつ……えつえつ？

開いた口が塞がらない。
頭が真っ白になる。

うわ……嘘？

電気はあるってこと？

「……嘘って何が？」

「えつ電気ですよ」

クスクス笑い出すノアに対してもついていけない僕。

「だってこきなり電気はあるかなんて聞くからビックリしましたよ」

「えつだつてわつわ……」

「誰も”知らない”とは言つてないじゃないですか」

面白そうだから首を傾げてみただけですよと僕を見つめたまま笑いながら言った。

僕は僕で呆気にとられてポカンとしてしまつ。

「ちよつと弄つてみたくなつてつい。いやあー新鮮でした。
魔王様と同じで弄りがいがありますね」

えつ？

……………。 ついひとま。

「『騙したのか!-?』」

驚きのあまり叫んでしまった。
ノアは長い耳を手で押さえた。

余程煩かったのかな
まあ自業自得だと思つ。

でもまだ笑つてますよ。

この嘘つきめ!-!
眉にシワを寄せて、

ノアを見る。

「…………勇者さん。顔が怖いですよ」

「もとからこんな顔です。もうここから帰つて下さるよ」

ため息混じりに囁つとノアもへの子に顔を曲げて

「分かりました」

一礼して背を向ける。があつと想い出したのかまた振り向く。

「さーのクローバー、トキお好きに使つて下さこね

微笑み後は紳士のような態度で後を出でいた。
それまでが酷かつたけどね……。

ノアも出でて行つたしとやつとくつがげる。上着を脱ぎ、聖剣も下ろす。

ラフな格好になつてベッドにダイブした。

ポヨンとしてなかなかいい、すぐに睡魔に襲われそうになつた。
が目に入つてきたクローゼットが気になつた。

クローゼットはベッドの隣にある。

でもあのノアが素直に出ていたことがちょっと気になつてたし、
去り際に”好きに使つて”言つていたのだ。

「怪しいよな……」

重たい体を起こしてベッドから降りる。

恐る恐るクローゼットの前に立ち、
取つ手に手をかけて引く。

開かれて目にうつったのはただの服。
いや薄暗くて余り見えないだけ……。

不意に手に取つて見ると、フリルの付いた白いワンピース。

別の持つてみると真っ赤なドレスや可愛らしこピンクのスカート

「つーーー。」

インナーまでもが薄ピンク、
タンクトップがあれど可愛らしい柄入りだし更にはミニスカまであるではないか！？

「どうこうことだよーーー。」

愕然とした。

確かに僕は女だけど……今の僕は男で通っているし、第一に似合わない。

とつあえず……

見かなかつたことにしよう。

そんでもつて明日ノアに一発殴つておこう。

うん。それがいい。

自分に言い訳をして勇者は眠りについた。

6話 迷いと迷惑

ふわふわな感触

このまま寝てたい……

でも……

朝日の光が許してくれそうにない。

仕方なくムクツと頭を上げ、クチャクチャになつた朱毛を手ぐしでとかしながら起き上がる。

キヨロキヨロ辺りを見渡した。

まだ覚醒していない頭が昨日の出来事を少しづつ思い出す。

(……夢だったらよかつたのに……)

頃垂れる。

「はああわわ～」

ため息まじりの欠伸吐き出しながら、体をほぐしてベットから降りた。

向かう先は脱衣室。

クローゼットがある壁を挟んだが所がそこ。
軽く支度を整えて、
いや問題のクローゼットへ。

ノアの変態的な思考な服からまともそうな服を探し出せないといけない。見れば見るほど使えなさそうな物ばかり……

(どうして民族服とか入ってるんだよーーー)

軽く怒りを覚えながら探す。

「たくつ」

あつ声もつこ出しちゃうけど、
気にしない。気にしない。

数十分後

やつとクローゼットから見つけたのが白いワイシャツに、ベイジュで七分丈のズボン。

これぐらいしかない。というかもう探す気力もないけどね……。

袖を通してみる。

サイズはピッタリ。だけど、ワイシャツはやつぱり透ける。
胸を隠すサラシが薄つらと見えるがまあ問題ないだろ(°)

変態がいかがりは。

さあノアを殴りに行くかと意気揚々と部屋を出ようとした。がドアの下に紙が挟まっていた。拾い上げて中を開く。細々と場所の名前

や図が載っていた。

「魔王城のマップっぽいな」これ

きっとノアが挟んでいつたんだろう。

親切なのか変な人なのかよくわからないやつだよなと苦笑がもれる。

気を取り戻して部屋を出た。

質素な造りの廊下。

魔王城というから派手な装飾をしているかと思つていたが違つた。夜歩いていた時はノアについていくのに気が集中していたし、夜の暗闇で気をはらつてなかつたので印象的だつた。

とりあえず魔王の所に行かなきやいけない気がする。必然的にノアも居るだらつし。

先ほどの地図を片手に廊下を歩く。

さつきから回りじてぐるぐる回りてゐる気がするけど氣のせいだよかね。

自分の居場所がよく分からなくなつてるなんてそんなこと。

……ありました。

確實、迷子ですよね。

来たときはスマーズに魔王所に行けたのになあ……

今行けないつてどうこういふことと内心シツコミながら構わず歩き続け

る。

「君、迷子でしょ」

えつ自分以外に誰もいない筈なのに可愛らじい女性の声が聞こえた。
あたふたしてちよつと取り乱した。
ちよつとだけね。

後ろに微かな気配を感じ振り向くと、身長がやや高めの女性が立っていた。

ここにいることは彼女も魔族なんだ。綺麗な容姿が目立つ。
金色の髪が胸の高さまできて、後ろはポニー・テールにして結いつて
いる。
白い肌がより可憐そうに見えるが眉間にシワを寄せてイライラして
るようだ。

「君、ここに何回来れば気が済むのよ」

「えつ？」

「だから5回目。
滅多に迷う人いないわよーーー。」

初対面の人にはいきなりキレられた。
見た目と中身のギャップに驚かされる。が気になる一言があった。

「あの来る数えてたつてことは見てたんですか？」

「当たり前でしょ。最初はたまたまた見かけただけだけど。
君何度も見かけるし」

苛ついた態度が急に柔らかくなつて

「困つてんじやないかと声をかけたのよ」

「あつあつがとつ」

「どつ致しまして。
で、何処に行きたいの？」

「えつと……魔王様の所」

「ああ逆よ逆。

ここは貴族様の客室エリアよ

魔王様の部屋は真反対側のもつひよこ上の階だわ」

彼女は僕が持つている地図に指で現在位置と魔王様の部屋を教えてくれた。

「ありがとつ」

「えつこや、当然のこととしたままでよ。
もう迷子にならないでね」

「気を付けます」

ペコリと頭を下げて礼をした。

早速教えてもらつた道順に歩き始めた。

「つてちつ違う
！」

そつちの道じやないわ！！

シャウトされた。

いや叫はれた

あれ？ 還うのと僕は足を止めて振り返った。

彼女が走つてこつちに来る。

大した距離ではないからすぐに追い付いて腕を掴まれた。

「！」

「君見ると心配だわ。

魔王様の所連れててあげる」

「えつでも悪いよ」

「あーもうー！」

ぐいっと腕を引っ張られて連れていかれる。さつきに向かっていた方向とまるで逆……。

訂正、僕はひとつや二つ方向音痴らしいです。

一人の足音がよく響いていた。

強く引っ張られていた腕はいつの間にか外され、今は並んで歩いている。

やつぱり僕が歩いていた道順は間違っていたのだろう。見覚えのない通路に出た。

さつきとは違つて薄暗いが怖くはない。窓から木々が生い茂つているのがよくわかる。

まだまだ歩く。

他愛もない話をしながら歩いていたが、

「君、新人さんだよね。道がわからないみたいだし」

「それでどういづいと?」

「えつ違うの?見ない顔だし。名前まだ聞いてなかつたわね

「えつ……」

(えへこみやへ……)

正直、戸惑つた。

本名で女子ってわかるからやつぱり……と迷つていると
彼女は立ち止まり、笑つて手を差し出された。

「私はレベッカよ」

「えつと……。

アッシュ自然而す」

まだ困惑いつつも、
差し出された手に手を重ね握りしめる。

「やつ。よのしくねアッシュ！」

笑顔が花よつに可憐で思わず、顔を赤らめてしまつぽんの可憐さだ。

「うそ。よのしくレベッカ」

「うう」と微笑み合つアッシュとレベッカ。

「アッシュ。一つこいかしら？」

「何？」

聞き返した瞬間に腕を引つ張られた反動を利用して抱き締められた。
いや僕の方が若干背が高いけどつて今そんないとせどつでもよくて
!!

「れつレベッカ!!」

驚きを隠せないまま固まっているとレベッカは、背中に回していた手を外し僕の頬を両手で挟んだ。僕を真剣に見つめてる。

「あつあのレベッカさん?」

さつきから状況が理解出来ず、慌てていると真剣だった表情から笑みに変わり

「アッシュユツテ男の子よね?」

「なつ何言つて!?」

「なんか自信なくて。初めて会つたときに女の子に見えたから

「そつそんなこれでも男の子ですつて!……ちよつまつひつ引っ張らないで!！」

否定した瞬間にワイヤーシャツの裾を捲られた。腹チラを一瞬許してしまつたが、咄嗟に両手で裾を押さえうまく回避出来た。

本当、不意討ちは勘弁してほしい。

いや、不意討ちじゃなくても困るんだけど……。

「冗談よ。冗談」

レベッカは笑つてたがどうだか。油断してると危ない気がする。

氣を引き締めないと!..

「でも男なら安心だわ」

「えつ？」

「魔王様に悪い虫つかないでしょ。最近多いのよ言い寄つてくれるやつが」

嫌々そうに話すレベッカ。余程魔王田当ての女子が嫌なのだらう。そもそも何故ここに魔王の話が……。僕、関係ないし。

レベッカはまだ嫌そうに話してゐるし。

「だつてね！あの可愛らしい見かけと大人の中身のギャップが堪らないらしいわ。わたしもだけど」

「そうなんだ」

なんか最後可笑しなこと言つてなかつたかな……。とりあえず頷いとく。

「でもアッシュなら大丈夫よね」

レベッカは不機嫌からじろりと笑顔に変わり僕の手を握りしめ

「えつえつ？何が？」

突然ふられて困惑する。

「魔王様を悪い虫から守つてあげてね」

『はあい！？』

思わず声が裏返ってしまった。

レベッカは構わず、更に手に力を込めて

「あなたを今田から魔王様ファンクラブ推薦、魔王護様衛隊長に任命するわ」

「……」

びっくりすることがあすぎて言葉が出ない。

「よひしへね隊長さん。 まあ魔王の所へ行きますか」

固まつた僕を引っ張り歩き出すレベッカ……。

折角まともな人に出会えたと酔つたの。うう泣きたくなつた。だけどこの先に更なる困つた人たちに出会はつとはこのときの僕は思いもしなかつた。

7話 自覚…？

時間を遡つて昨夜の事。

「本当にこれでよかつたんでしょうか？」

ノアにため息を吐つかれた。

勇者を客室に送った後、仕事を書斎でしていた俺のもとにわざわざ来てこれだ。

あんまり信用はしていらないのだろう。

ため息を吐きたいのはじつはいつだつていうの。

「仕方ないだろ。」
リゼが言ってたんだから

ノアには田を向けず黙々と机に向かい、ペンを走らせる。

「それははどうしようナビ……

あの”リゼ”ですよ。

五分五分な気がするんですね

ぐちぐちと煩いので見て見れば渋った顔でまだ言つか。
目を反らし、無視して書き続ける。

「別に勇者がどうと言ひ訳ではなく。

約10年近く溶けなかつた呪いが早々に解けるのか疑問を感じるのです」

「それは俺だつて感じてる。でも信じるしかないだろあの男を。」

「ですが」

ノアは机に両手をドンッと付いた。

机が軽く揺れるし、書き途中の書類に彼の影のせいで被さる。

邪魔をしてと苛つきながら見上げてみれば、険しい表情の顔が間近に迫っていた。

「今まで大変だつたじゃないですかーーお忘れですかあの事件を…」

「……」

俺は手を止め、

ペンを机に置きノアを見据える。

「別に忘れたわけじゃない。

やつがどれだけ迷惑者か十分わかつていいるつもりだが」

「じゃ……」

「でも可能性がある。信じるしかないだ。

例え間違つっていたとしてもなノア」

落ち着いた口調で言つたつもりだが、まだ納得したつもりはないのだろうか……。

ついた手を退かさない。

「分かつてくれ、これは俺の我が儘だ」

にらみ合いが続いていたが、ノアが目を閉じ机からゆっくり離れる。

「分かりました。

でも無茶だけはしないで下さこよ」

「ああ」

「はあー。もう魔王様の頑固ぶりは敵いませんよ

ノアが苦笑した。つられて俺も口元が緩む。

「よく言つ。お前も十分頑固だ」

「そうですかね」

「そうだ。一緒にいてよく思いしらされるだ。まあ俺を止められるのもお前しかいないしな

俺は言つかると、

さあ仕事仕事と言つてまたペンを持ち書類を書き始める。まあ俺を止められるノアもそんな俺を納得したのかもう口出しはしてこなかつた。

その後はノアも手伝いをしてくれ、

早急の仕事だつたものは思いのほか早く終わった。

「やつと終わった」

机に倒れ込むと上から笑い声が聞こえた。
顔だけそちらに向けるとノアが笑っていた。

「やつやつてると本当に子供見たいですよね。 夏休み終わった感じの」

「ノア」

「失礼致しました。 カノン様」

笑顔から微笑みに変わりしかもこいついつときにも前で呼ぶなんて、
そういうのをずっと見て言うんだよな

じつーと見つめてもノアは微笑みを返すだけこっちの方が照れるし
……。

目を反らし立ち上がる。

落ち着かないし、いちがあかなそうだしね。

それに今日はもう遅いから浴室に戻る。

「お休みですか。 カノン様」

「ああ。 少し片付けたらなノアはもう戻つて休め明日も早いだろ」

「ですが」

「じゃ命令。 早く寝ろ」

俺は机の書類やらなんやらまとめて片付け始める。
ノアは暫く見ていたものの、

渋々頷いて歩き出す。 が、ドアノブに手をかけた時に

「でもリゼが関係なしにあの勇者や…いえアンジュレッタさんは私的には好きですけどね」と言い残して書斎を去った。

ドアの閉まる音と同時に書類を落とした。

慌てて床に散らばった紙を拾い集めるがノアの一言が頭からじびりついて離れない。

『私的には好きですけどね』

（それってどういふ意味だ！…）

頭の中がパニックになるし、今更ノアの所へ行くのも失礼だな。もつ夜中だし……。

「爆弾残しやがって」

顔を手で覆いながら呟いた。

散らばった書類は綺麗に整え、机の上も綺麗に片付けた。が自室に戻らず、椅子に座り物思いにふけていた。

（もうあいつ何考へてるかわからない）

悩んでも答えがでないものにずっと悩んでいても、仕方ないのに思考がどうしてもいつてしまう。

どうして悩むのかも自分ではよくわかつてない。

ノアが好きになつたからか親友としてショックだったか。はたまたアンジュレッタが気になつたのか。考へても答えは出ないので。

ただアンジュレッタの事を考えるとちょいとだけ胸が苦しくなる。
それはなんとかはよくわからないけど……。

わからないことだらけで頭が痛い。

こうこうに誰か物知りな……あつ……

(やうだ。こうこう時じやーー妹に聞いひ)

人間界も往き来してこる妹なら、いついつ感情にこじても詳しいかも。

それに今日帰つてきたとこりだからちよつとひこーし。

解決の糸口を見つけたかもしれない。がこのことではちょっと氣がされた。

わつやく明日聞くべとこし、とつあえず今ま寝るべとこしよ。

でもなんか……。

明日は明日で何かが起きそつた氣がある。

平和であつますよつと……。

と祈つて書簡を出た。

レベッカが足を止めて笑顔で振り向かれた勇者です。

そつそんな満面の笑みでこっち見るのやめてください。
いわゆるこっち見んな的な…

げんなりしながら、此処までつれて来られた事は言つまでもない。

だつていきなり『魔王へ護衛隊長』に任命され、
しかもここまで猛ダッシュだ……。

ありえんし……ああ流石魔族。

(感心するよ……。本当に)

あつそうやつ、今僕が目の前にしてるのは巨大なドア。
昨日、魔王に初対面した所のドアだけど
今じつくり見ると、洒落ていて彫刻などされていて、
でもここまでの大さは無意味だと思つ。
と頭の中でシッ ノミをかましてみると、
レベッカはずつと僕の腕掴んだままドアに手のひらを向けて、

「……が魔王様の所よ。でも……」

「でも?」

「今時間は臥室で寝てるはずだから襲……起しへ行きましたか

す」く輝いた笑顔で言われた……。

「えつちゅつ……今襲つて言いかけたよね……」

「あ」
「あ」

「つて無視ですか……」

レベッカは片手を振り上げ意氣揚々に歩き出す。
本当、パワフルですよ彼女と呆れながら。
掴まれいた腕にまた力強く引きずられていく。

広い廊下をひたすら進んでいく。
引きずられて体勢的にも辛くなつてきた。

「レベッカ。もう自分で歩くから、だいじょ……」

「うう」

遮られた。

つてか着くの早……

しかもまだ掴まれてるし……

今がチャンスと腕を振るがビクともしない。恐るべし……。

そんな事はお構い無しにレベッカは、首元からネックレスらしい紐を手繰り寄せてアクセサリーらしい物を僕に見せた。

「アッショ」これ何だと思つ?」

「えつ鍵だよね」

「大正解」

見せてくれた鍵を首から外し田の前のドアの鍵穴に通す。ピッタリと鍵穴にはまり、捻るとカチャと小さな音がした。ドアノブに手をかけて押すと少し開いた。

「ふふ。開いたわ」

「えつちょついいの」

「いいの。いいの。

こんな時間まで寝てる方が悪いんだから」

これまで掴んでいた腕をスルッと外し、慎重にドアを開ける。レベッカは手引きしながら、部屋の中へ進んでいく。

そもそもなんで掴まれていたかは疑問だが、やつと解放されてほつとする。が直ぐにその安息は絶たれた。

なざりなら……

『お兄さま……』加減に起きなさい……』

瞬時にハイジャックして寝台の脇らみに向かって一気に距離をつめた。

たぶん寝台で寝ているであろう魔王に股がる。で、あのセリフだ。

(どんな娘だよ！――)

内心苦笑だ。

たぶん僕の顔はひきつっていたに違いない。

掛け布団がもぞもぞ動いてる。

いや、もがいてると言つた方がいいかもしない。

「へつ――」

なんか声が聞こえる。うめき声みたいな……。

「お兄さま。いい加減に！――」

「重いわ！――」

あつ流石の魔王も切れたらしい。

レベックが股がつていたのにはね除けて、ベッドの上に立つ。

どこにそんな力が小柄な体に有るのかと、疑つてしまいが目の前の状況に僕は呆然とします。

「痛い！――お兄さま急に立たないでよ」

レベックは勢いよく床に落ちていた。

腰を押さえて撫でている。

まだ眠そうな藍色の目が、無理に睨みをきかしてレベッカを見ていた。

髪も息も乱れて、寝起きが最悪といった感じに表情から伺える。

「レベッカ……。今何時だ？」

「えつ 6時30分だけど」

「俺は夜中の2時に寝たんだぞ」

「そつそれがどじたつて言ひつのよ」

どじたもこうしたもと魔王は眩いて、更に険しい顔つきに変わりベッドを降りた。

床には同じ睨みを効かせたレベッカが座っていたがヒョイッと簡単に捕まえられていた。

「お兄さま離してよ……」

「……」

無言で対抗する魔王はお姫様抱っこをして、廊下に連れていきレベッカを放り出す。

(つて……いいのか……)

慌てて僕も扉に向かうが、魔王は小言を眩いて最後に『シールド』と言う言葉だけは聞こえた。

駆け寄った事だけあって聞こえた言葉だが、この言葉は魔法だよね

勇者に冷や汗が浮かぶ。

• • • • •

(待つてよつてことは……。閉じ込められた！－)

魔王は僕のこと気にせずまたベットに入つて行く……。

二れも荷ひれて、いはるあかづなのが
ないから無意味だ。

仕方なく脱出を諦めて魔王のベット隣にイスがあつたので座つた。

邪気ない寝顔ですやすやと寝ている。

このまま起きるまであとどのくらいかかるのかと、僕はしばらく眺めていた。

9話　自業自得ですかー！？（前書き）

後半がちょい微えろかも…
でもすぐコメティに戻ります。

9話 自業自得ですかー!?

漆黒の長い髪が枕にひろがり小さな呼吸音が聞こえる。

また眠りに入ったみたいだ。

僕が近くに座つても、気付かないくらいだから余程眠かつたんだろう。

う。

「……普通。起きるだろ。普通は」

愚痴つてみても、
起きる気配を見せない。

(魔王のやせになんて無防備な……)

こんな姿を勇者の目の前にわざと見せたら普通は消されるだらうな。
いくら約束でも、野蛮なやつだったら即あの世じや……。
それをやらない僕もどうなのかと頭を抱えた。

一定した呼吸音こじりひりまで眠くなつてくる。
いかん。いかん。と左右に首を降つて眠気を飛ばすがこのままでは
寝てしまいそうだ。

(まだ面白いものとか有れば起きてられるナビ……)

辺りを見渡す。

白ベースのシンプルな部屋で、ベッドの近くにある机は紙束がどつさつ置いてある。

後は小さなクローゼットとブランダが有るくらいで、良く言えばシンプル。悪く言えば殺風景って感じが取れる。

別段楽しいやうなものなんてない。

強いて言つならこの変わり者の魔王だけだ。

『爆睡ですか！？』てシッ ハリを入れたいけどレベッカのような扱いをされるのは嫌だし……。

でもこいつ寝てられるとかよつかい出したくなるのも人間の性だよなあ。

魔王が起きるまでじつへり観察を始めた。

まつ毛がクルツとして長い。

それでいて鼻はスーととして高めで、白く透き通る肌してるしスベスベしてそう。

唇もふつくりしていて柔らかそつ。

そう、正に美少年！－

（つて何考えてんだ！－！僕……。でも女として完敗だ……）

「はつ！－！いやいや、完敗とか勝負してないし－！第一ここにつけ男だし－－！」

思わず自らシッ ハリをかましてしまった。

魔王は起きる気配ゼロ……。

（騒がしかつたでしょ！－！なんで起きないの）

ベッドを叩くが、これも無反応。
自分が虚しくなるだけだった。

でも落ち込んでばかりでもダメだと僕が首を降つて、

(えいーーー！うなつたらーーー)

意気込みを新たに、次は触つてみようーー！

実はさっきからほっぺが気になつて気になつて仕方なかつた。
だって、柔らかそつなほっぺたが目の前にあるのは誘惑以外に他な
らないし、

やましいことなんてない、ない。

自分を正当化させて優しく触つてみる。

(うわー。スベスベだーー！)

ちょっとティッシュが上がる。

まだ起きそうもない魔王に、調子が乗つて髪を撫でてみるが髪もさ
らさりで柔らかい。

(なんだこいつーー！つつ羨ましい)

ちょっと嫉妬しつつも撫でる手を止めないでいたら、撫でていた手
が小さな手と重なつた。

「えつーー？」

魔王が起きたのかと思い急いで手を引いたが、それは出来なくて腕
を引き込まれた。

突然の事で驚き、田を開けてみた。

体が浮く感覚があつた後に弾力性があるものに、落ちた感覚がちょっと怖く。

恐る恐る田を開けてみた。

目の前をちらつと様子を伺うと魔王の顔のアップ。

それに慌て顔が赤くなる。

（かつ可愛いって今はそんなじやなくって！）

見とれる場合じやない。

自分が巻き込まれては、誰がこの状況を打破するだ！！
と意気込んだが僕は抵抗を試みて、あることに気が付いた。
背中に手を回され抱き抱えられているよつた。

いわゆる抱き枕的ポジション……。

隙間ないし密着しているため行動も制限されてしまった。

（…………）

とりあえず抵抗をしようにも、この寝顔を見ると罪悪感が否めない。

ああ大変なことになっちゃったよと僕は頑垂れた。

こんなに困ってる僕をよそに幸せそうに寝てるな、おい！！

いつその頬をつねつてやろうかと、自由な右手を動かして頬をむに
つと掴んだ。

意外に伸びる、伸びる。

まあ情けない顔になつたといひで離してあげた。

……本当、これだけ近いとびつしていいかわからない。
なんせ顔がドアップだし。

大人しくしどけぱよかつたと後悔をしていたりして……。

(起きそつもなかつたから行動に出たんだけど……失敗だつたなあ)

はあ……とため息を一つ。

でも見た目（子供）に反して強い力で抱き込まれてるよな。
よくそんな力が出るもんだと感心するぐらい。もしかして魔王族は力
強いのか？と考えたが魔王だからかに落ち着いた。

せつしきつねつていたところが多少赤みを帯びてきた。

（あつちよつと強かつたかな）

ハツシタリでやつてしまつたよつな自覚はあるので、多少の後ろめ
たさはある。

自分でやつといてなんだけど痛みが和らぐよつに頬を撫でる。
すると一瞬、魔王が笑みを浮かた風に見えた。

（……まさか起きてる？）

でも一瞬のことだし、

「魔王？起きてます？」

問い合わせてみたものの返事なし……。仕方なく撫で続けていた。
が唇が気になつた。

あつ決して変な意味ではなく、形もいいし色も赤くて……
だから純粹に、

「羨ましいなあ」

呟きながら手で触れたら、触れていた唇が動き

「そんなに羨ましいの？」

驚いて距離を置こうとしたが、自分が抱き抱えられているのを忘れていて背中に力がかかる。

「危ないよ。急に動くと床に落ちる」

「なつ……だつて！？それよりいつから起きて……！」

慌てどよめいている僕を魔王は微笑んで更に引き寄せられた。魔王の胸に収まる感じに包み込まれた。

「ハツ離せ！！」

今まで、かつてないほど暴れてみたものの。全く効かないし、魔王が多少邪魔そうな感じだけ受け取れた。

でもめげずに抵抗をしてると耳元でため息と詠唱が、

（あつこれヤバいパターンですか！？）

強ばる僕に囁くように『チャーム（魅了）』と、魔法の耐久性も実力も弱い僕には跳ね返す力もなくあつという間にかかった。

「大人しく聞かないからいけないだぞ」

更にため息を一つ、聞こえた。

それとともにだんだんと体が熱く火照つてくる。

(何これ！？)

今までに感じたことのない感覚に戸惑いを覚え魔王の服を咄嗟に掴み耐える。

シワが付くほど引つ張っている、それでもたまに耐えきれず声が漏れそになりなんとか飲み込む。だが熱は治まるどころか更に熱くなつていく。

「勇者？」

異変に気付いたのか魔王は僕の頬を両手で挟み上に向かせられる。が今は出来るだけ魔王に顔を見せたくない僕は反らするが、やはりそんなことは出来なく藍色の瞳と見つめ合つ。

「大……じょうぶ……気にし……ないで……」

「全然大丈夫じゃないだろ！？」

「……あ……はあ……いいから……離して……」

強めに言い放つたが、さっきまで見ていた顔なのに、たんだん視界がぼやけて視点が定まらない。

頭の中の隅では、ずっと見ていたいのに……と思つたり……。でももう何も考えられなくなつていた。

もう火照る体が言うことをきかないから……。

すると魔王の指が僕の目尻をすつとなぞり。透明な何かを拭われた。

きっと涙だらうかあ少しだけ視界がはれ、困った顔の魔王が見える。

と思つたら、頬と頬が当たりそつながらじまで近づいて耳に息を吹きかけられた。

「……ひあ……なつ……なあにを……」

息がかかった瞬間に電気が走ったかのような衝撃が体を走る。その様子を確かめてから魔王は離れて、

「勇者。まさか魔法の耐久性は全くないのか？」

「…………うん……たぶん……」

「……そう言つことは早く言え。手遅れになるぞ」

「へつ？」

問われたことに頭がついていかず、ただアホぽい返事をしてしまつた。

魔王は気にせず僕の額に触れて、また呪文を唱え始める。

僕の体が余程熱いのだろう。魔王の触れた手が冷たくて気持ちいい。そんなこと思いながら僕はただ腕の隙間から魔王を見ていた。

すつと手が離れると唱え終わっていた。

「解いたからもう大丈夫だ。……勇者あれでも初級の魔法だぞ」

「……しつ……知ら……ないもん……」

「だからあそこまで普通の人は効かないから」

顔を片手で包みながら眉を潜めながら言つ。がクスつて急に笑つて

「俺を触りまくつた罰だな」
「俺を触りまくつた罰だな」
「俺を触りまくつた罰だな」

急に何を言ひ出すんだこの魔王はと起き上がろうとしたが、まだ体は言つ」とを利かず目だけで訴えたが……

「違うつて顔してるけど俺の髪を撫でてるときから意識は戻つてた」

「なら早くいえや……」

あつ呂律は大分戻つていたみたい。
内心安心たが魔王は頬を膨らまし、

「だつて触られただけなんて損じやないか、だつたら俺だつて触り返したい……」

「どんな理屈だ……」

「それは勇者に言われたくないよ。君がはじめにしてきたんじゃないか……」

「ううう

団星なために言ひ返せない。

(確かに「そのとおり……だナビ）

僕はキリッと睨み。

「でも寝たフリをするあなたもいけないだぞ……それに君じゃなくアッシュだ……」

魔王は冷ややかな目で見下し、

「それで？」

「えつ……？」

「寝ていただけがそんなに悪いのか？」

「えつと……。寝てると寝たフリとはわけが違つて……だからもう嘘をついたのが悪い……！」

半ば呟きみに言つて放つとクスつて魔王は笑つていた。冷や汗が背中を濡らす。

「でも俺は途中本気で寝ていたぞ。嘘じゃない。それに起つしたのは勇者だ」

「……」

優しい口調で言われたが目が笑つてない。正直怖いですよ。

この魔王は……。

返事が返じづらくなって無言になつちやつた僕も僕だけ。

すると魔王は急に僕の頭を撫でて、

「だから、その……。

いくら朝だとしても男の部屋に1人でもう行くんじゃないよ」

「えつでも」

「返事は?」

「うう……はい」

無理やり頷かせた感が否めないけど。

「やつやつ心配して面つぶてくれたみたいだから素直に頷いとく。

よし、と魔王は満面の笑みで納得し撫でていた手が離れた。

魔王はベットからおり、くるりと覗の方に回る。

僕も重い体を起こして少年にみえる魔王を見る。

「じゅ朝御飯にじょつかアンジュレッタ」

「……」

一瞬、時間が僕の中で止まる。

「どうしたの?」

「その呼び方はやめて

「可愛いの?。とうんじゅ、アンジェで」

「魔王……。人の話聞いてました?」

僕が問い合わせても、笑顔でアンジェ、アンジェと言つてゐる。

(あーこれ……無理パターンだよね)

僕は苦笑するしかなかつた。

はーいーーー呼ばれて飛び出てジャジャジャジヤーンッ！ーって呼ばれてねしいー！

一人ツツ「ミも結構辛いけどめげないよー。あーテイショント高い僕（勇者）です！！」

もうテイショント上げないとやつてられないからやあ。この惨劇を田にしたら……ね？

説明すると……。

パイ投げ大会始まつてます。つて一言で片付けてしまつたけど、そこいらの壁がべつとべつとクリームが貼りついてもつたいたい。

どうせなら、食べれないパイ使つてくれればいいのに飛んできたパイを軽々避ける。

僕は反射神経と体術はずば抜けていいからこんなのは楽々だけど……。

あの一言がなければなあ。

事の発端はノアの一言。

やつと朝食を食べられると思つてたのにこれだ。

（勘弁してくれよーーーもうーーー）

腹ペコな腹を抑えて、飛んでいくパイを見送りビツビツといつたかを思い出していた。

回想

魔王の寝室を後にし、案内された部屋は応接室みたいな部屋を小さくコンパクトにしたような空間だ。

すでに朝食の準備されており、小さな机の上にパンが山盛り積んであつた。

あんパン、食パン、メロンパン、カレーパン、アップルパイ等……。もう色んな種類が揃っていたが見ただけで食べきるというのがわかる。

(いつたい誰がこんなに食べるんだよ)

内心呆れていたら、魔王はすでに席についていた。机が小さいため席が隣か、向かいかのどっちかで。僕は一瞬迷つたけど魔王の向かいの席に座る。すると後ろからコンコンと軽い音がした。

「どういだ

魔王が返事をするとドアの開く音がする。

振り向くとあの目立つ銀髪が視界にグッと入ってきた。ノアだ。軽く礼をした後、無駄のない動きで魔王の隣に立つ。

「あれ？ 魔王様まだ召し上がつてなかつたんですか。しつかり食べないと力出ませんよ」

表情を崩さず注意するノアに対し、魔王はノアを見上げ

「いや……。食べるがノア。お前これねぞどだら？」

「あつ……もうバレましたね」

「あたりまえだろ！！」

ノアは口元に手を当てぐすつと笑う。
どうやら耐えられなかつたらしい。

「笑うな」

「失礼致しました。

でも勇者さんが食べきるかもしませんよ」

「……」

「つていいや食べないつて！！

そして魔王なぜ黙る！？」

僕は慌てて立ち上がつたところで一人の笑いが響く。
どうやら謀つたらし……。

（何これ！―もの凄く恥ずかしいんだけど）

頬が熱くなるのを感じた。

それに自分の状況を思いだす。

立つときに勢いよく手を叩きつけた机からそつと手を戻し静かに席に座る。

(バカにしやがって!)

腕を組み顔を背け、ムスッとふてくされる。

「アンジユ?」

僕に落ち着いた声がかかった。

「ちょっと悪戯がすぎたね。氣にしてるの?
それならごめん。ほらノアも謝つて」

「はあ……。ドゥモ、スイマセン、テシタ」

「……」

魔王はまだましな方だけど、

ノアの一言に全然、誠意が伝わってこない。

第一にこれ謝つてないじゃとないと逆に呆れた。

「アンジユ?」

魔王の問いかけにちょっとだけで様子をチラッとだけ見る。

上目遣いで不安そうな表情にドキッとした。

なんか健気で、心が揺らぐ。大人げないなと思い直し、

「……もうこいよ。食べよ!」

体勢を変えずに答えた。

もじこのまま沈黙を続けていてもずっと上目遣いで見てこられそうだし……。

魔王の声のトーンも上がって、嬉しそうな声が耳に届く。

やつと食べられると思い僕は向かい直す。

魔王は既にロールパイなど皿の上に乗せ食べていた。

ノアははじめ微動だにしなかったが急に思い出したかのように魔王に尋ねた。

「あつ魔王様ちやんと伝えました？勇者さん」

「……何を？」

徐にバケットからアップルパイを手にした魔王が手を止めてノアの方に向く。

「契約の話ですよ。契約したらもしかしたら国王に殺されるかもしれないってことですよ」

「ノア！」

魔王は持っていたアップルパイをノアに投げる。がノアは軽く避ける。

「へつ？」

僕は僕で思わず、情けない声をあげてしまった。
バケットに積まれたパンに手を伸ばしていたが止まる。
だつてありえない話だつたから。

「それは契約の手前に話すつもりで、まだ言つつもりもなかつたぞ

「……」

「えーでも悪いことも知つておかないと」

「それひどいこと」とへ。

苦渋の顔した魔王に対しノアはシレッヒ「書いたまんまですが」といい放つた。

さうに僕は動搖した。

さつきまでの笑顔が嘘のよう、冷たい空氣に変わっちゃつと怖い。

「ノア……」

魔王はさうにパイをノアに向かつて投げたが、ノアは最小の動きで避ける。

これを数十分続けて今に至つています。

でも『なんでだろ』と僕は問いたい。

だって、魔王が何故そこまで怒つてゐるのかわからない。

ただ隠していたことが、僕が契約するともしかしたら国王様に消されるかもつて……。

そんな馬鹿げた話あると思わないもん。

これは笑いたくなる。

そんな二人は僕を置いてまだやつてゐる。

「魔王様もつたいたいですよ」

「煩い！！」

「そんなんだから子供だと言われるんです！…もう26歳なのだからしつかりしなさい…」

「……分かつてゐる。そのぐら」

か細い声がすると魔王の振り上げる手が止めた。

「でも、せめて自分の口から伝えたかった」

苦虫を噛み潰したような顔で言つ。

「……やつですね。申し訳ありません。出過ぎたまねをしました」

ノアは深々と頭を下げた。

魔王は『もういい』と答えたノアはそこからゆっくりと顔を上げた。が沈黙が部屋を満たす。誰一人喋らうとしない。僕は耐えれず、思い切って吹き出すように笑う。もちろん作り笑いだけど。

「あはは。どうしてそんなに暗いのさ…別に契約しても消されるはずないでしょ？」

「……いや、消される可能性が高いですよ。悪者さん

ノアは静かに言つ。

「なんで？」

「なんでつてふつうに考へてもみて下さー。

あの人間の魔王ですよ。あの分からず屋が素直にこひら側の話を聞くとは思えません」

「分からず屋？」

「はい、そうです。今までにも……つて魔王様？」

言葉切つたのは魔王がノアの袖を引っ張つたから。そして田で訴えてるのがなんとなく僕にも分かつた。

「俺が話す

「ああ、そうでしたね。お任せします」

ノアは微笑んで頷き一步後ろに下がつた。

魔王も頷き返しその後僕を見据えるが、表情はさつきより穏やかだ。優しい口調で、

「まず、何から話そうか？

「この国の話、それとも人間の話、それともアンジェの仲間の話？」

どれでもいいよつと魔王が言つてくれたけど。

一番きになつたのは僕の仲間……。

なぜここでティオの話が！

と驚かずにはいられなかつた。

1-1話 迷惑な……

これまで一緒に旅をしてきた仲間。魔王討伐のため、共に戦うと誓い。後ろを守つてきてくれた。

ときにも途中で出くわしたモンスターや魔族は必ず必死に逃げ、殺さずをもつとうに一緒に居てくれた仲間。

その彼とは魔王城に入ったとたん空間が歪み僕は吹き飛ばされて、気がついたときには彼は居なく。必死に探したけど見当たらなくて……。僕たちは別々に別れてしまった。

もう後戻りも出来ず、不安を抱えながら進んで行くしかなかった。

(彼を……。

彼を知ってるついでに「こと……」)

僕は自分の手を強く握りしめ、手のひらが汗ばむ。

「どうして仲間のこと知ってるの?

途中で失踪したのに……」

「うーん。簡単に言つと保護した

「……保護つてあの迷子とかのとき預かってくれる……あの施設？」

「そりそり。

それに勇者以外は俺の所に来れないよくなつてゐるからな

「えつそれつてつまつ……」

恐る恐る聞くと、魔王がニヤリと口元を歪めて、

「せうつまつ、もう引き離されることは決定事項つてわけだ」

その不適な笑みと魔王の言葉に僕は凜然となつた。がすぐに心から沸々と怒りが湧き上がつた。

（卑怯だ！）

思わずにはいられなくて怒鳴りそつこなつたがなんとか堪えた。

「これでも理由があるんだぞ。

勇者と共に一行を生け捕つて言つたら言葉が悪いけど、生かして捕まえるためのだ

「……殺さないの？」

「ああ。俺は殺しが好かんな。つて前にも言つた気がするが。でも、村まで作つて保護してゐるからティオもそこにはいるぞ

優しい声で魔王に言われた。

驚きと共に怒りが覚めていく。

でも一つ疑問があつた。

（さつきの笑みは何だつたんだろう？）

魔王はニヤリとまた笑つて、

「ただの悪戯だ」

「えつ今……心よつ読んだの?それに悪戯つて」

「顔に書いてあつた。

それに弄られるより、弄る方が面白いからな」

にじつて笑う魔王が可愛らしくて、思わずきゅんとした。が、言葉の意味を考え、その思考を振り落つた。

(もづ引つ掛かつたりしないぞ!—!)

僕が意思を固めていたとき、

「でもアンジューお願いがあるんだ。もうひん、契約の後でいい」

もつときは裏腹に困り顔で問い合わせた。僕はちょっとと思い当たるもの、自信がないから知らないふりをして……。

「えつ何?」

「その……ティオを止めてほしい。今大変なことが村で起きてて……」

「…

喋りづらいのかためらつてているようなあ。
しかも目を反らしがちに言つてゐるけど……。
でも何か照れてるようにも見える。

(気のせいかなあ)

僕が首を傾げたときに。

「テイオガ……」

「ティオが？」

「女性を口説き回つていて被害というか、迷惑というか……」

「……………あめ……………」

「わざわざいた女性にかたぱりしかり声をかけてくるひじくじ」

「……あの馬鹿は！――」まで来てまだ口説くか！――」

耐えきれず、バンッと勢いよく叩きつけて怒^{じな}ってしまった。
一瞬だが魔王はビクッと肩を揺らした。がでもすぐ何事もなかつた
かのように僕を宥めるように微笑み。

「そんな引き立たなくとも被害って言つてもそんな大きいもんじやない」

「でも……」

「契約が終わつたらちゃんとノアが案内してもらつ」

し、
大丈夫と魔王は笑つて頷いた。ノアに向けてくるりと首を後ろに回

「頼む」

「かしき」まつました

ノアも了承していた。

「でもちゅうとよろしこですか?」

「何だ?」

「実は勇者さんのお連れさんから伝言を預かっていますので言つても
よろしいですか?」

ノアが一步前に出て魔王に並び、たいした事無む事ひと魔王
は振り返り。

「伝言? 聞いてないが」

「はい。預かったのは今日の朝の事でその……言ひやびれてしまい
ました。

申し訳ありません」

ノアが魔王に詫びをあげていたが、僕は僕でティオの事が気が気じ
やなくて仕方なかつた。

(こつたこづうすれば一日で被害が多発すんだよーーー)

相方ながらに頭が痛くなる。

前から女たらしだとはわかつてはいたけど。

自分がいないところまで荒れるとは思つてもみなかつた。

「で、伝言は？」

魔王が聞くが。つい僕も

「わつそうだよ……内容はざつなの？」

「そんな急かさないでトセイ勇者さん。
ちゃんと預かってますから」

『ほんと瓶を調べてから一枚の紙を取り出しへ

『親愛なるアッシュ』

俺はじうやうはぐれてしまつたらしい。面目ない。
方向と魔法だけが取り柄な俺なのにな（笑）

うんで、迷つた俺に親切な兄さんに会つた！
ノアって言つたかなあ？

迷つた俺を村に連れてつてもらつて、そのうちアッシュもへんつて
聞んだけど。
でも俺……。

恋の魔法にかかつちやつたみたい？

もう、出会つた彼女達が可愛くて、可愛くて。

それに……すげえ美人さんだから口説きに行つてきまーーー！
もしダメでも根性で当たつてくるよ

だから、俺の恋路は邪魔しないで下せー。

アッシュはなにげにモテるんだから……
本当邪魔しないでよね！

ティオよつ

「はああ……」

ノアが読み終わると、同時に僕は叫び声をあげてしまった。
だって……これいつも通りのあいつなんだもん。

情けなさ過ぎて正直、涙が出そうになる。
一緒に討伐しようって言つてたのになんでこつも離れただけで目的
が違つてるんだろう?
僕はただただティオに飽きた。

魔王も伝言を聞いてから困惑てる様子で、

「えつとこれ……、本当に彼からの？今までの魔術師の印象が違
うナビ……」

「……間違いなくティオです。この女たらし加減と、この口調は…
…」

「ああ。 そうなの」

魔王は魔王で納得したような、飽かれているような……。

気持ちは十分に分かるので僕と魔王はお互いに苦笑を交わした。

(でもこままでじゃいけないよ)

僕は気持ちを引き締めて、「でも、このままティオを放つておけな

い……今から連れてくる」と眞面目としたのにノアに遮られ、

「その必要はありますんよ」

「どういへりと?」

「どういへりとだ?」

驚いたは僕だけじゃなく魔王も、僕と声が重なった。

「この驚き方からわつとこれも聞いてないんだと思つた。

「実はもう捕まえてはいるので事実的には大丈夫ですよ。まあ危険人物だったからの対処ですが」

「……」

もともな対処でノアの仕事の手際とに感謝するよ。

つてか!! 勇者一行の仲間が変態なのもどうなのかも思つた。いやあ前から思つてたけど……。

魔王は驚いていたがすぐに表情を戻し、

「でも、これで契約の話は落ち着いて出来るなアンジュ」

「まあ確かに」

僕も頷いて見せた。

が、ノアは爽やかな笑顔で僕らに向か。

「……どうしては焦れたいから早く契約進めてくださいね」

爽やかに見えてもどす黒オーラが見える気が……。

「わかつてゐよ」

魔王はへの字に口を曲げて答えていたが。

（何でも気付かないの！？）

この事に僕は軽く慌てていたが、でも口を開いたらまた余計な事を口走りしそうなので、口を固く閉じていた。
でも……。
思うんだ。僕は……。

（もうこんな城出でいきたい！）

切に思つ。

12話 契約

「とうあえず続きを話す

「やうだね。うん」

僕は大きく頷き。

ティオの話がまとまつた所で、どうして僕が契約すると消されるのかという本題に入った。

「つまりは邪魔だからだ」

「なんで？」

「考へてもみる。いくら契約書が本物でも王が信じるはずないし、且つお前…アンジェが裏切つたと思う可能性が高い」

「なんでそんな…」

契約書が本物ならどうして疑う必要が…！」

「あるんだよ。なんせ反乱軍も同じ…」

『魔族』なんだから

魔王が言つた一言で僕は固まつてしまつた。
だって契約書も魔王の意志も本気なのに、

王は同族だからと冷たい目線を送り且つ信用させずにただ邪魔で使
えないと分かれば消すというのか……。

きっと今僕は、責ざめているに違いない。

聞いたときから血の気が引くような感覚に襲われ、頭の中では否定の言葉でいっぱいだった。“そんなはずないと”だが……

真剣に語る魔王に目が離せなかつた。

だつてこんな真剣な人が嘘をつき、人々の殺害や犯罪に加担していたらこんな眼差しはできないだろうと僕は息を呑んでただ魔王を見つめた。

（だつてそんな……そんな事つて……）

これが最初に浮かんだ言葉。
信じたいけど信じられない。

「信用出来ないなら、さつさと語った”勇者村”に行つてみるといい。きつとわかるから」

切なく笑いながら言う魔王に心が揺らぐ。
でも尚、魔王は言葉を続け、

「でも絶対約束する

アンジェ…いやアンジェレッタ。

俺は絶対君を守る

口説き文句のような言葉に僕の体温は一気に上がつた。

「なつ何を言つて…！」

思わず、片手で口を覆いたじろぐが魔王はそんな僕に氣にも止めず
ただ強く、

「俺と契約して」

その真っ直ぐな瞳に捕まるまであと数秒だった。

しばらく、固まってしまった。

誰だつてあんなことを、魔王に言われてしまえば田を見張るだろつ。
僕は伏せ目がちに頷いた。

「契約するよ。ただ条件がある

「条件?」

「ああ。いいだろーつくらい俺からも提示したつて」

口元だけ笑つて見せた。

今はどんな顔をしていいかなんてわからなかつたから。

「いいよ。なんだ?」

「僕は死んだと王様に伝える。じゃなきゃ契約はできない」

魔王の濃い藍色の瞳が驚いたように見開く。
でもすぐに表情を戻し、

「わかった。条件を呑もう。でもいいのか?」

「ああ。いい」

契約してしまつのだ。…………
彼らのことを思つないがほりあらしかない。。。。

13話 求む

只今、青空教室ならぬ青空カラオケやられてる勇者です。

まだ勇者なはず！…ってあいまか！！

まーそれは置いといて、なぜ青空カラオケかつて？

話せば長くな「さつきからじちやんちやうひせいわよアッシュ…！
歌うときは歌いなさいよ！…！」

「なつ……ひつ……はい……」

……実はまさかのレベッカに連れられて、勇者村に向かってる最中
です。

えつ話飛びすぎ？

それは僕も思うけど……。

実は契約書にサインしたときに、レベッカが扉を足で蹴り破つてき
た。しかも第一声が『どこ行つてたのよバカ兄！…』だ。

これは皆（つて言つても三人しかいないけど）固まるよね。
流石のノアも固まつてたから、これは相当地獄婆と言つのか、パワ
フルと言つのか。

まあ苦笑ですよね。

その後珍しくキレたノアの形相といったからなかつた。

魔王がパイ投げで壁を汚したのもイラついていたのも原因だけど、
決めてはレベッカが壊したドアだ。

『このバカ兄妹！…』

ノアが一喝し、「魔王様はちやんとして下さにもつといい年でしょ！」とか、

「レベツカ様もいちいち物を壊さないで下さーーー！女性なのだから慎ましく淑やかに」とか、

「とにかく物に当たるのはやめてください。

これは貴方達の物ではないのですよーーー！」とか、

眉毛がつり上げて、長々とお説教をしていたのは言つまでもないけど。

端から見ていた僕は、ちょっとぴり面白かつたけど。

なんせ、あの魔王やレベツカがしゅんっと縮こまつて素直に頷いていたから。

だから反省しているのかなと思つたけどまさか！？

レベツカが僕の腕を引っ張り、部屋から連れ去られるなんて思つてなくてただただ驚いて、

（だつてレベツカが探してたの魔王の方だしーーなんで僕ーー？）

笑いたきや笑え的な精神で今こつしてレベツカについて行つてゐるし
だいです。

でも少しだけありがたかった気がしないでもない。

小さな机を精一杯身を乗り出してあんな風に誰かに求められる」と
なんてこれまでなかつた。

”勇者”だから称えられ頼られてはあつたが僕自身を見てくれる人
なんてティオか育ての親と兄弟たちくらいだつたから。

他は全て可哀想な人達だつたから……。

だから心底驚いた。

ここまで強く、誰かに求められたのは初めてで正直戸惑つた。

”勇者”ではなく”アンジュレッタ”として……。

魔王だから当たり前だけそれでもとても嬉しかつた。

(普通勇者にお願いしたりしないしね)

つい緩み笑顔になりそうな顔をなんとか引き締めて契約交わした。
今でも思い出す、あの強い眼差しにキュンと胸が疼く。

これも初めてだから何が原因か謎だけど、でも分かることが一つ。

あのまま彼処にいたのでは、いつか表情が表に出てしまいそうだつ
たから。

(ちょっとだけ。レベッカに感謝かな……)

僕はクスッと微笑み隣で陽気に歌つているレベッカの横を歩く。

勇者村に着くまであと少しの事。

今小部屋で、小さな試練が出されていた。

呪いにかけられた子供の姿は決して背は高くはなく一般的な高さだ。しかし自分がノアに向けて投げたパイは壁にしつかり付いており、いつの間にか残骸が床に落ちている。

壁や床は一様ノアの魔法で守られているから汚れてないといえば汚れてないのだが、油物を拭き取らないとシミになってしまって掃除しなければならない。

俺は長い髪は束ねて後ろに結い、三角巾をかぶり汚れてもいい服となぜがレースがあしらわれたエプロンをつけた。もう強制的につけさせられたんだけど……。

後ろで笑ってるノアを一発殴りたい衝動に駆られるが堪えて。片手に雑巾を持って今、背で必死に伸ばして、上の壁に付いた油を拭き取ろうと限界まで振り上げるが届きそ�で届かない。常につま先立ちしているから、よろつきながらならなんとか落とすが……。

(……何やつてんだらう)

情けなくて笑えてくる。

側にいる見張りは俺に休む隙をとらず、作業を見守られてるし。

「なあノア……」

「なんですか？魔王様」

「何で俺だけこの部屋の掃除なの？」

振り向かず問いかかると、ノアの空気が更に重くなつたよつて怖くて振り向けない。

「当たり前です。汚した張本人でしょ」

「うう……。返す言葉もござらません」

「……分かればいいです。それにあとでレベッカ様にもドア直してやつてもうこりますか?」

だからちゃんと掃除して貰ださいよと釘を刺された。いつもながらに淡々とした口調だつたけど、ちょっとだけイラッときたいや、わざわざからこつこつりつこつてるけど。

(わかるわかるけど……。原因お前のせいじゃなかつたか!)

言いたい発言をまた堪え、それに言われたからには手を休めず動かして汚れを取る。

やつぱり身長低いのは不便に感じる。

はあつとため息を吐き、ずっと伸びばしていいる腕が疲れてきた。

(……くわつ……届かない)

もうがむしゃらに掃除してやうつかと更に手を伸ばすが、つま先立ちした足がふるふると震えるだけで届かない。必死にやつてるときにすつと影が隣にきて「う」と音がした。音のした方を向くとイスが置いてあり、

「わづ、届かないならこれ使つて下せよ」

「あ…ありがとうございます」

まさかのノアの手伝いに思わず見つめてしまつ。ノアは三角巾に触れて、前にずれていたのだろうか、後ろに引つぱり、

「魔王様……私ここまで鬼畜じゃないですよ。でもちゃんとダメなことは学んでいただかないとそれに26歳なんだからそろそろ落ち着いて下さ」

「…痛い所ついてくるね」

「側近ですか」

爽やかに笑われて、つられて笑つが俺の方は苦笑だ。

（やつぱり小ちい頃から一緒に居るだけあるよなあ）

感心して「やつ早く掃除して下さ」…これでも魔力消費してるので私なんですから」言われて素直にイスに上り、壁の汚れを落とした。

「そついえば勇者さんに何か伝え忘れてません?」

「えつ……なんだっけ?」

「とても大事なことだつたと思つですけど……」

「『あ……』」

魔王城を出て森の道、まだまだ歩き続けている。

さすがに青空カラオケは終わって、他愛も無い会話をしていたレベ

ッカと僕。

あと10分くらいで着くらしい。

のどかな風景になんだかさつきの出来事が嘘のようにならかに落ち着きを取り戻していた。

「アッショつて絶対嘘つかない？」

「どうしたの急に」

「私、嫌いなのよね。嘘が」

「えつ」

握り拳を作りながらがだつてつと嘘は相手を騙す事なのよいこと思つ
！…つとレベッカに熱弁されてしまった。

さつきまで穂やかだつた瞳がギラギラと闘志を燃やすような瞳に変わり、しまいには僕の肩を捕まれて揺さぶられて同意を求められた。

「れつレベツか！！おつ落ち着…」

「だからアッシュはビリなのよ…！」

（完全…無視ですかレベツカー…つづかつ勘弁して…）

流石にここまで揺さぶられると気持ち悪くなつてきたときに空から何か降りてくるのが見えた。

凄い速さで… じつに何か落ちてくるつて表現が正しいかも。 うん？ じつに… ？

アツ！……………

「レベツカ！！」

危機を察した僕は大声を呼びかけ、肩を突き飛ばした。「えつ！！」と声が聞こえ、バランスを崩れたのがわかつた。が僕の肩を掴んでいたレベツカは僕を巻き込み、押し倒すような形に倒れてしまった。咄嗟にレベツカの頭を地面すれすれで支えるように左手で受け止めたけど、はつきり言つて今の状況はかなり気まずい。

「だつ大丈夫？」

レベツカの安否を気遣うものの、今の状況では確實怒られるのは目に見えていた。

今僕の左手は地面に付きレベツカの頭を支え、乗り上がらないようにはけて倒れた反面に顔が5cm以内という何とも間近で…。端正な顔立ちも、綺麗な藍色の瞳も魔王とそっくりでドキリとしてしまう。

(流石兄妹だ)

妙に納得していると、

「大丈夫わけ……ないでしょ……どうにつけようと……」

叫び声で耳がやられそうになつた。
キーンと耳鳴りがするほど。

「おっ落ち着いて」

「これが落ち着いていられますか……！」

やつぱりレベッカの怒りゲージが上がつたと同時に、"ズドン"と大きな音があがる。

「何、今のー？」

音がした方向を一人して見るとそこはさつきまで僕らが立つていた場所に小動物が入りそうなくらいの穴が出来ており地面は深く抉れていた。

「……もしかして助けてくれた？」

「うん。……ごめん。咄嗟だったから」

「そう。じつにじめんね。怒鳴つたりして

「いいよ。それよりレベッカに怪我がなくてよかつた

自然に笑みが綻んだ。

レベッカの目が一瞬見開いたよつた気がしたがすぐに顔を背けられ、ほんのり赤くなっていたのは氣のせいか……。

「それよりそろそろ離れてくれない? アッシュ」

レベッカに言われて今の状態を思い出してパッと起き上がりて離れた。

「「」めん」

「いいわよーもう謝らないでよ。気にしないから」

レベッカも起き上がりて苦笑して言つてくれた。
そのとちも『…………のよーー』とぞつからか声がした。

「今変な声が聞こえなかつた?」

「ええ。聞こえたわ」

レベッカが領き一人は辺りを見回すが特に変わりはなく、のどかな風景のまま。

「変ね……?」

不思議に思つて暫くそのまま警戒していると『「まったく間違えたのよーーもう痛いじゃないのよ。すれいでほしかったのよ。」』とHマーがかかつた声の方を見るとさつき抉れて出来たであろう穴から青い何かが顔を出し地面の端を掴むと、更に青いのがまた出て

『よこしょつと』掛け声のような声がする。

最後にひょっこり出てきた頭でわかつた。なんと鳥だ。鳥が這い上がりながらグチグチ文句を言つている…! 唸然とした僕とは違ひレベッカは鳥を見据え。

「あんただつたのね。トリオ」

地面上に足をつけた鳥は軽く羽根についたあわい土を呑み落としてから、ぐるり首を曲げ。

「トリオじゃないのよ…レベッカ様ちゃんとオルセーって名前があるのよ…」

いかにも不機嫌な声で答える鳥がレベッカを睨み、レベッカも負け時と睨み返す。

「あんたなんかトリオで十分。でなんであんな加速して落ちてくんのよ…!」

もしあれに当つたら私たち死んでたわ…!」

「あら? 大丈夫ですよ。レベッカ様頑丈だから大丈夫なのよ

「なんですか…!」の鳥男…」

「聞き捨てならないのよ…! 漢字だからって私の名前じゃないのよ…」

「「「ストップ」」」

僕が声を張り上げて叫ぶと、一人と一羽が一瞬時が止まつたかのように言い争いが止んだが逆に一人から睨まれ、

「アッシュ！邪魔すんじゃないわよ」

「わうよ……これは私とレベッカ様の戦いなのよ……」

「でつでも」

「……でもも、それもないの……黙らじやい（なのよ）……」

息もぴつたりに怒鳴られ、また言い争いがはじまりた。僕はため息を吐いてただ呆れた。

（仲が良いのか、悪いのか……）

やめてほしくて怒鳴つてもこれでは前に進まないし第一にめんどくさい。

争いは嫌いだし、見のも起こすのも嫌だ……。

それでも暫く収まるのを待つていたが、一向に終わるようすがない。

（もう……いい！使つてやる）

目を瞑り、『大氣よ水と成れ。彼の者を溺れさせよ 水の牢獄』と一人に向けて詠唱を発動させた。

すると一瞬のうちに空気が水の糸に変わり、それがいくつも折り重なつて一本の大きな紐のような水の塊に変わった。

それは直ぐ様足元から一気に頭まで覆い尽くす。

それは一瞬の事で叫ぶ事など出来ぬほど早く彼女等を襲つたのだ。

(これで大人しくなつてくれればいいんだけど)

数分後

「……じょつ……冗談じや……ない……わ」

「……まつ……まつたぐ……その……通りなのよ……」

ぐつたりしている一人と一羽。

流石にやりすぎたかなつて思つたけど、魔法が苦手な僕はそんな加減の操作なんて出来るはずも無く。

こんな風になつてしまつて申し訳ない気持ちがこみ上げ、

「じめんなさい。でも喧嘩はやめてほしいから……」

「……わかつたわ。もうやらないから」

「本当?」

「本当よ」

レベッカは笑顔で頭を撫でてくれた。

鳥も『もういいなよ。今回のことは水に流すのよ』と近寄つてまるで慰めているようだ。

和やかな空気が流れたあとレベッカが思い出したよ、
「そういうえばオルセーなんであんたが此処にいるの?」

「あつすつかり忘れてたのよ!魔王様に言付け頂いてるのよ!朱色の毛の子にって」

「えつ!?

魔王からつと僕とレベッカは驚き、二人顔を見合させてまた鳥を見てしまつた。

どんなことを言付かつて来たのか……。

なんとなく不安が募つた。

爽やかな風がざわつと木々を揺らし、素肌を通り抜けていく。そんな中立ち往生している勇者です。

魔王から伝言をもらつてこるところの鳥、オルセーって言つたかな？ つこやつしまで一緒にいたところの、わざわざ使こを出させるなんて余程重要な事を言い忘れたのか……。

（…………めんどくせーー）

この魔王なんか言い忘れ多い気がするのは気のせいかな？

「で、言付けて何よ？」

痺れを切らしたレベッカが問う。

「…………レベッカ様には聞かれないよつことも言つてているから教えるのは…………その無理なのよ」

「何よそれ！－失礼しちゃうわお兄様たら」

「まあまあ」

苦笑が混じりつつ、落ち着いて貰おうと言つたのに「笑うな」と怒鳴られるし……。 どうしたもんか。

それでもレベッカはちゃんと魔王の言い付けを守るのか。

ちょっと離れた場所まで歩いていて木に寄りかかりこひりを睨みを
気かせている……。

「とりあえず本題に入るのよ

「うん

オルセーが仕切り直し、僕も改めて頷く。

「魔王様からの伝言はレベッカ様に身分の事は伏せ、後の事は全部
話せとの事なのよ

…… っへ？

今明らかに変な顔になつてているだらう僕は、オルセーの言葉に頭が
ついていかない。

「つまりね、あのレベッカ様が嘘が嫌いのよ。
それはもう嘘ついた奴はボロボロになるくらい打ちのめされたの
よ。

だからあなたも嘘を付かないよつて気を付けなさいなのよ

まさかの手が出る発言……

笑えない、笑えないよ。

（ええもつ付いちやつてますよ……！

男つて言つちゃつたもの……！）

驚きのカミングアウトに僕の口元がひきつる。

そんな人だったとは……。

ただのお節介な女の子だと思つてたのに……！

それに心配までされてしまつた……。
ちょいショック。

「つかーー何回田だよつて突つ込みたいへんこに驚く」と今
いだけど。。。

「あんたちゃんと聞いてる?なのよ」

怪訝そうに聞かれたので慌てて答えたものが絶対嘘つてゐる。
「きつ聞こえてるつてーーでも全部つてそんな……聞えるわけない
よー?」

「身分以外はなのよ。何をそんな驚いてるのよ。男のくせにしかつ
りしないなのよー」

飽きれ口調で言われ、渴も入れられた……。
しかも僕は女で……つて隠してゐるから当然バレてないだけなんだけ
ど。

人生で鳥に渴を入れられるなんて……そりそりないよな。
うん。やっぱ鳥だし。

「なんかバカにしてるでしょあんたなのよ」

青い綺麗な翼で描かれて言われた。
明らかに疑われてる。

「えつ何「肯定よ肯定なのよ」

「ちつ違つ

「何が違つてこいつのよ。そんなに違つなら普通すべ筈だのよ。」

「

……ちつ……してちつたり顔された……

なんか逆にからかわれてる気がするよ。といか絶対……！」

「あんた。顔でモロバレなのよ。だから見え見えなのよ。」

「見え見えって……それに僕はバカにしてないし」

「してた……これ断定たのよ」

このあからさまな言い方に、僕の中で苛立ちがプチッと音をたてて崩れる。

作り笑顔でそつと手を伸ばせばオルセーは「何なのよ」と言いながらそれほど警戒心もなくただ睨むだけ。この隙をみて一気に鳥の頬掴む。

オルセーの驚く声が上がる。

うん甲高い声が……。
正直ちよつといつむをいいくらい。

そして首を激しく振つて掴んだ手を振り払おうとするが、僕の手は決して離さないようしつかりと掴み外さない。

やがて鳥の動きが止まり、荒い息が聞こえる。

「はあ……はあっはんひのよ……あんた……
(はあ……はあなにすんのよ……あんた……)」

「ナニモシテナイテスケド」

「しぐるしぐる…ひいかりせやくせりやしほやこはのよ…（じぐるしひる…いから卑く離しなせこなのよ…）」

オルセーが翼で僕の手を挟み込み力で外そと試みてるみたいだけ、まったく効果無くただくすぐつたいだけだ。まあ当たり前だけだ。

「わづ余計な事を喋らなになら離すよ。鳥ねえ」

「ひつひつれいなのよ…」

「……」

僕はただ冷たい田で応対する。
オルセーがビクッと体をゆりこ、

「はつはんたーはんのふくらじひなせこなのよ
(あつあんたー反応くらじしなせこなのよ)」

「……」

言葉に返すのも面倒なのでわざとキツく睨みつけると、
オルセーは更に身震いをして

「こや…せひ、わづしゃくつません
(こや…せひ、わづしゃくつません)」

裏返った声で叫ぶ。

よつぽど堪えたみたいだ。

強く掴んでいた頬を軽くすると、やつと逃げて距離を置く。

（以外に弱い……？）

掴まれていた頬を擦り軽く涙が浮かんでいるよつだ。

「別にそこまでは言つてないけど。で、話は終わり？」

「まだ……まだなのよ」

「えーまだあるのー？」

つい口が滑つた。が仕方ないと想つ。
本当に多いだもん！－！もつ。

軽く頭をかきながら改めて聞く。

「で、何？」

「……じゃ言つわなのよ」

怯えていた姿からすつと変わり、パツチリした愛らしさが此方に
向き。

また喉の調子を整え、

『今夜の夜部屋に来てくれ、あつこれは他言無用だから』

「はあー？」

わつかの伝言の声とは違い、まるで魔王が喋つてこるよつな声。

つまり本気の声だらけ……。

つて今まで手抜き??

それはそれでムカつくけど、今はそんな事を考へている場合ではないくて……。

またなのかー!!

何度目のお呼びだし……。

つか!! 魔王は私の母親か!!

あつこ、叫んでもいいですかね。

寧ろ呼ばせてくれえ ーー

それぐらい注文多いなとうござつし始めていた。

「……また顔に出てるなのよ。それは氣をつけた方がいいなのよ」

「あついけない」

オルセーに言われて、さつと顔を両手で挟む。

いくなんなんでも緩み過ぎだらけ。

それに頭の中で『今夜の夜部屋に来てくれ』がリピートされている。

うん、行きたくないからね。

面倒くせこのでお断りしたいけど仕方ない付き合つか。

「まあやつはひとつだからあんたも頑張んなさいなのよ。じゃ私はこれでなのよ」

オルセーは急に言い出すと翼を広げ飛び立つとしていた。

「つちよつちよつといー」

僕の声は虚しく飛び立ってしまった。

「本当に言だけ……はあー、レベッカにどうせ話はすことんだよ」

「私に何を話すのよ？」

驚いて身を捩ると、すぐ後ろにレベッカがいった。

（レベッカ戻つてくるの早すぎ……）

半ば焦りながら、冷や汗が背中を這つ。

「それはその……。えっと

「はつきりしないのね」

レベッカは低音で、はつきりしない僕に吐き捨てるみつこいつ。

「こや、さう……ちやんと……」

一度腹を決めた事。

いや、決めさせられた事だけど。

このまま、ずるずる引きずるよつまじだりつ。僕は覚悟を決め重い口を開いた。

「……つまり、アッシュはニックネームで本名はアンジュレッタ。お兄様の呪いを解く協力者で今いるわけね？」

「はい。そのとおりです」

思い切り視線が痛い。流石、美人の睨みはドスが効く……。

「……つで女の子なの？」

眉を器用に方眉だけ上げ、藍色の瞳がギラリと覗き。それはまるで鋭く突き刺すかのように眼差しを僕に向ける。怯みそうになるがそこは堪えて、まっすぐにレベッカと向き合つ。

「……私は正真正銘女です。
嘘付いてごめんなさい」

「それはもういいわ。それより……」

急にガツシッと両肩を掴まれて、背中を木に押し付けられると

「お兄様の事をどう思つてるの？」

「へえ？」

「だからお兄様の事よ！？」

突然に魔王の名が出てきよとんとしてしまつ。

何故？魔王の名前がこの状況で出てくるのだろうか。

必死に考へても魔王と勇者の関係だし、本来は敵同士なのだ。
素直に変な魔王ですと答えるべきか悩んだが、それはレベッカにも失礼に当たる。

だから考へ直して、言葉を絞り出す。

「……うーん、ちょっと強引で天然そうだけど憎めないかな」「どうかよーーー」

「……そこの。つて私は人柄を聞いてんじゃないわよーーー好きか好きかどうか」

レベッカの発言に田を見開いて驚く。
『好きかどうか』ってまさかのそつちーーー?

出会いつてまだ1日……24時間も経つてない。
ましてすぐ、好きになるなんて一田惚れぐらいしか考えられないじゃないか。

第一に僕は魔王にホの字にもなつてはいけない。

「別に何とも思つてないけど……」

「えつじや恋愛対象外つて事よね?」

「わうだよ」

「そうーよかつた」

レベッカの険しい表情が一気に明るくなり、まるで花が咲いたように可愛らしい笑顔がこちらを向く。

「えつ何が? どうしたの?」

拘まれていた肩は外され、変わりに両手をぎゅっと握りしめられ、

「もうアッシュが悪い虫かと疑つてしまつたわ。ごめんなさいね」

「えつうん、大丈夫」

僕も笑つて返す。

もう怒つてないのかレベッカもにこにこしている。
レベッカがなんでそんなに拘つていたか謎だが、誤解が溶けただけでも良しとしよう。

「でも、アッシュ」

「何？」

「嘘ついたから罰に何かやつてもいいわ

「…？」

輝く笑みで言われたことにただ驚いて、

「ちょっと罰つて何…？」

「そうね」

これ迄の笑顔とは違い、なんか企みを含む笑顔に変わった気がする。

「アッシュの正装が見たいわ

輝く瞳が」ひらりと向く。

「……男物で？」

何となく分かつたが、あえて気付かないふりをしてみた。
だって着たくないだもん。

衣物の服なんか……。そつ願つていたのに、

「違うわよ……女の子の正装よ」

やつぱり、あた——！

「いや、それは無理……絶対無理……」

必死になつて無理と云えるが、レベッカは逆に楽しそうに『駄目』

の一点張り。

言葉の最後にハートが付くべらりと甘い声で言つし……

「まつ他にしよう」

「嫌よ

「何で——？」

「何でてそれは

そんなんに嫌がるからよ

誰もがうつとうするような笑顔で言われたら……

「つて……そこかよ……」

思い切り突っ込みをかました。

「ううわ。普通は頷かないと思いまし。

「うんそうよ。でも命令だから着なさいね」

レベッカもレベッカで全く引かず。

黙秘で構えようとしたが、レベッカの目が着うよと訴えるように訴えかけられ、

「……着ます」

もう頷くしかなった。あははと笑うしかない。

「ああ行くわよ」

レベッカにぐいっと腕を掴まれてまた歩き出す。

「待つてや！」

田^たが合^あつた瞬間から逃げられたので思わずやつちやつた悪者です
あつらへ段^{だん}つに田^た手^てはテ^トホ^ホく。

僕を見るなり、猛ダツシニて逃げたすんだもん
失礼極まりないよね。

更に傷を舐めた原因は、刀を引き戻しにいたときの繩内
された部屋。

優雅に紅茶飲んでやかるし
片手には女性の手を添えてはにかんだ
笑顔。

もうサブイボです。

案の定逃げられ反射的に追いかけた。

か徐々に距離の差が縮まり手が届きそつなどこりできた。

そこで思い切り、首を猫のように掴んで強烈なパンチをお見舞いしてあげましたけどね。

綺麗に入ったパンチの反動で地面に倒れ見事完全に伸びている。

「いいの?」んな事して

終始見ていたレベッカは不安そうに戸惑っているようだ。

「いいの。いいの。いつものことだから」

僕は笑つて誤魔化す。レベッカはティオを心配して言つてくれた事だが本当にいつもの事だ。

毎回毎回、この女たらしは！！立ち寄る村や街にいるお姉さま方に次々と声をかけ、”お姉さん俺と遊ばない？”など言つてナンパをしているし。

たまにだがセクハラ行為を働く事もある。

正義の味方が、こんな犯罪者でいいのか……いや、確実に良くないけど。

まあ失神程度だから心配する必要もないだろう。

「でもアツシユ。せつきの言い方だとこの人知り合いなの？」

「うん。出来るなら赤の他人つて言いたいけど……。説明するなら腐れ縁かな。小さい頃からの付き合いなんで」

「小さい頃から？」

「セツ小セツ頃からだよ」

笑いながら返すと、

レベッカは交互に僕とのティオを見て、

「……大変ね」

「うん。本当にどこにかしてほしい。出来る事なら根性叩き直してほ

しー

苦笑が漏れる。

変態で、女たらしだが魔法の腕はピカイチだから仕方ない。王がティオを見込んでいるのだから。

変態なのにね！！

大事な事だから2回言つた。

「それにしても綺麗な顔立ちね」

レベッカは屈んでティオの顔を覗く。

確かにティオの顔立ちは綺麗なものだ。

手入れがいい薄い茶色い髪は短髪で、端整な目鼻立ちだ。

今瞼で閉じているが淡い緑の瞳が隠れている。

そう普通にしていればティオだつてかつこいい部類に入るはずだ。まあ残念なところがあるから女性に逃げるわけで……。折角モテ要素があるので勿体ない話だ。

「でもどいつもするの？これ」

「どうしようか。そこまで考えてなかつた」

僕は腕を組んで考えていると、レベッカは待ちきれなかつたのかティオの顔を叩き始めてていた。

「あの……レベッカさん。何やつてるの」

「えつ起きないかなつと思つて」

笑顔で言われても。

まあ僕が本気で殴つたからそういう起きないと思つけど。

「そいつ危険だから寧ろ近寄らない方が……」

「そういうの？凶暴とか」

「そいつ女た」「きやー」

「レベッカー！」

叫びとともになんかバキッだか鈍い音も聞こえた。

ティオを見るとまた殴られたようで両頬が赤くなっていた。

（片方は僕のせいだけど……）

「あつーーー！」めんなさい。殴るつもりはなかったのに

「何されたの？」

「えつ急に腕掴まれて驚いてつい

えへっと笑って誤魔化しても怖いけば。まあティオも悪から仕方ないよね。

「仕方ないよねってひどいよアッシュ」

「げつ読まないでよつて起きてたの？」

瀕死の状態にでも陥つたかと思ったのに、怖いくらいにタフだといつ。

「それにこの子のはアッシュの鉄拳より数十倍いい……寧ろナイス

」

「いいんかい……」

「うわっ……」

一様突っ込みをいれとくけど親指をたてて、満面の笑みを浮かべているやつにきくとは思えない。

僕はまあ慣れてるからほんのいい的だけど、さすがのレベッカも引いている様子だ。

恐るべしティオ……

「そこのお嬢さん

「ナツナニよ」

「僕とデートしない?」

「はあ……?」

「……こいつバカだ!!!!!!

バカと言うしかない。アで始まつてホで終わつてもいい。この状況で誘うか普通……

しかもレベッカ……。堪忍袋の限界なんじゃ

「ねえアッシュ。もう一回殴つても彼構わないかしら」

「あつうん。大丈夫だと思つ」

案の定切れた様子。

黒いオー ラ見えます。見えてますよレベッカーー！
僕は僕で苦笑いしながら言つたけど、自業自得だよね。

「へっ？ なつ 函る？」

ティオ緊張感ないし。おどけた顔してるけどこれからのは裁きを想像
すると身震いする。
頑張つて！！

その後ティオの叫び声が響いたのは言つまでもない。

17話 呼び出し

時刻は夜。

嫌がるティオを無理やり引き取つて魔王城まで連れてきたはいいが……。

ギスギスとした目線に僕は苦しめられていた。

「確かに俺はここに来るよう言つたが……」

眉間にしわを寄せながらギラリとティオを睨む魔王。
今までのこりやかな態度と違い嫌いオーラが漂つている。

「ここにも連れてこいとは言つてないぞ」

「あーそんな事か。しかたなかつたんだ。こいつを放つて置くのは危険なんだから」

「なあ！…そんな言い方酷いぞアツ「黙れ変態」

チャツチャ入れられたので軽く一発殴つておく。

軽くぶつ飛んだけど、気にしちゃいけない。まあ流石にこれには魔王も驚いて目をぱちくりさせたが、僕は気にせず何事もなかつたかのように振る舞い。

「大丈夫だよ。基本的弱いから」

「えついいのか？その前にそつと問題じゃない気がするが」

ぶつ飛ばしが効いたのか。

さっきまでも敵意は何処へいったやら、拳動つている魔王に僕は親指を上げ。

「大丈夫！大丈夫！」

へらへらと笑つて答えると小さな声で「ひつ酷い」など聞こえてきたが面倒なので無視。

「それに一様僕の仲間だし顔くらいは見せておいた方がいいかと思つてね」

「まあ確かに」

魔王も「ぐつと頷くと、

「魔王様はただ勇者さんと二人きりになりかつたですよね」

「そうそ……！……ってなんでお前がここにいるだ」

銀色が輝く美形さんが魔王の隣に立っていた。

「それは貴方がここにいるからですよ」

「いつ意味分からんし……それに嵌めんな！」^は

「うふふ。照れちゃつて可愛いです」

口元を押されて笑うノア。

顔が真っ赤にながら反抗する魔王は可愛い。

確かに弄りたくなる。ちょっとノアに混じつて僕もやりたいぐらい

だ。が後ろからボソッと聞き取れない音がすして首を回すと、僕の隣に頬を紅色に染めたティオが立っていた。

「美しい……」

「……はあ！？？？」

僕は自分の耳に入つた単語が信じられて咄嗟に口から出つた。わりと大きい声だったにもかかわらず、まだ討論している二人には聞こえていなかつたようだが……。

（でも何故美しい！？）

怪訝そうにティオを見てみれば、うつとりした目で胸位置に手を組み、ある人を見つめていた。

ティオの目線の先には満面の笑みのノア。

まるで乙女のように見守る姿にサムライボが走る。

僕は見てられなくて顔を背ければ、隣にいたはずの気配がなくなつていた。

不思議に辺りを見渡せば前をの方でノアの右手を取り片膝をついて見上げているティオとそれに少々驚いているノア、呆気にとられた魔王という妙な絵図。

（なんだこれ！？）

叫びたい衝動をなんとか押さえてどう切り出そうかもたついていたら、

「君はなんて美しいだ」

「はあ」

「銀色の髪、その白い肌、そしてそのキリッとした目、そんな困った表情でもなんて可愛らしき」

「……どいつも」

どんどんキザなセリフを吐いていくティオに良くなれば淡々、悪く言えば冷たくあしらつて見えるような態度で耐用している。流石としか言いようがない。

感心していると袖を引っ張られた感覚。僕はそちらに目線を落とせば、人差し指を口許に寄せて”しー”と声を出すなど言つサインと上目遣いの魔王がいた。

(つーーーーーめつちやかわいいーーーーー)

可愛らのあまりに悶えていたとたつをより強い力で引っ張られ、

「今のつまに出てよ」

小声で言われたがそんな言葉に僕は構つてゐる余裕が無く、口元を手で覆つて照れ隠しするのが精一杯だった。

「気付かれなによつてそつと出るわ」

「……うん」

惚けていたから反応が遅れたが、大きく頷いた。

魔王も笑つて頷き返し僕の片手を取られる。

そつと後退りしながら魔王は誘導して、物音をたてないよつてむ

つくりと確実に目的の場所に向かつた。
まだノアはティオに捕まつてゐみたいで、でも何故か満面の笑み
で話している。

（怖い……）

恐怖を感じながらも、見事静かに部屋から出の」とができた。

小さな手が力強く、温かい。

あの部屋を出てからも手をぎゅっと握られて進んでいく。
何處かへ向かつてゐるらしい。

無言なために暗い廊下に僕たちの足音が響く。
でも嫌な沈黙ではなくちょっと恥ずかしいような、照れ臭いような
そんな感じ。

暫くすると一つの扉の前で止まつた。

この部屋は見覚えがあつた。朝来たことがある確か……魔王の寝室
だ気がする。

さつきのは書斎の部屋からは大分距離があるからこゝなら大丈夫と
考えたのだろう。

魔王はなんか口ずさむとドアノブを掴み扉が開いた。

「じりん」

「じりん」

軽く会釈して入ると、予想どおり魔王の寝室で「樂にしていいから」と書かれていた「アーディングの協」ある椅子に座った。

木戸二はバソビ二腹ハサ一六箇ながメ主事ハジニニ思つニ、

「さて、邪魔がいなくなつたからゆつくり話せるね」

卷之三

「今日は帰らないから」

えりちゃんー?」

子供には似合わない言葉で攻められて僕は慌ててしまつたが、隣からふつと吹く音が聞こえ。

「嘘だ、嘘」

100

相手はその様子が余程面白かつたのかまだ笑つてゐる。

思い返して、自分は大人人と暗示をかけて

「ああ話した小事があつてだな

「何？」

「どうやつたら戻れると想つ?」

……はつ思考回路が軽く停止してしまつたよ。
まさか本当の議題の呼び出しか!?
としかシッコリようしかつなかつた。
この魔王なんとかしてください。

月が空の中心で真ん丸に輝いていた頃。

初夏のためそんなに熱くなくどちらかと言えば涼しい夜だ。だが僕は不機嫌だった。

それが消して夏のはじめで暑いからとかじやなく、理不尽な質問のせいでイライラとした黒い感情が心を支配するからだ。

凡人の僕（勇者ですが）にそうそう思い付くはずもなく、
ただ懸念な目線を魔王に送りながら僕は睨んだ。

「いくら待つても出できませんよーーー！」

「だが

「だがもしかしもあるか……」コンニヤロー

「アンジュ落ち着け」

まあまあと落ち着きを払つた魔王が僕を宥める。

その余裕たぬか僕はぐれたい
二三三三の二二三三の二二三三

いた体勢は戻す。
二三ヶ月更替しないで、同じ形。

「……で？」

「いやまだ話してなかつたから思い当たるかなと」「

「さう言つこと?悪いけどまだ全然考えてないし

言われたことをひねくれて返す。

そんな態度な僕に苦笑で頷く魔王。

わかつてゐなら呼び出さなきゃいいのに。

「で他には無いわけ呼び出した理由は?」

「あるには有るが……

今まで余裕な表情が少しだけ曇つて見えた。
といふか明らかに口ひもつた気がする。

（怪しい……）

僕は訝しげに魔王を見つめ。

この際、意地でも聞き出さうと僕は強気に言い急かすと、

「何。その気になる言い方は……はつきりつづきつづけん……」

「そうそう。いつ言つことは直ぐに答える方がいいよカノン

綺麗なテノールの声が頭上から聞こえた。

（今、二人しかいない筈なのに……）

僕は咄嗟に上を向くと燃えるように赤い髪と瞳の持ち主がにこにこ

と僕に向けて微笑んでいる。

「…………！」

要るはずのない人物が僕の後ろに立っていた事実に驚き過ぎて椅子から落ちそうになつた。

そこを赤髪の青年が肩を抑えてくれたおかげで落ちなかつたけど。

「おつと。気をつけ」

「どう、どうもあつがど、う、」

青年の輝く笑顔が眩しくて、見ていたこつちが何故か氣恥ずかしくなり俯いてお礼を言ひ。

「どうも致しまして」

彼の声がした。

きつと見上げたら誰もがつゝとりしそうな笑顔で言つてそつだ。輝く笑顔つていう言葉がきつと似合つからだからある意味で遠慮したい。

無意味に輝いている奴は僕として苦手だから。

だがいつまで経つても抱えられたまま。

身動きを取らうとしてもがつちり挟まれて動くこともままならない。

「あのー。そろそろ離し……」

「あのじやなくてコゼつて呼んで」

「へ？」

「きっとアホ面になってしまった。ただひつ僕は思わず奇声をあげてしまつたとき、

「そりそろいいかな？リゼ」

声をした方を向くと神々しい笑顔の魔王。でも声はなんだか震えていたような気がしたが。

「アンジュを離してあげて、じゃないと話が進まないだろ？」

「うふふ。わかりましたよ」

茶化すリゼに魔王はなんだか目が笑つてない気がする。

（なんか一人……怖つー）

内心冷や汗を流し二人を交互に見ていたら、捕まられていた力が弱まり青年に体勢を整えられた。

「これいいでしょう？カノン」

「まあうん」

「ダメダメ。そんな返事じゃ魔王らしくないもん！たまにはちゃんと僕の事叱ってくれなきゃー それにこれもわざとなの気付いてたでしょ？」

「あの……？」「うう」と

話の糸が見えないのでつい、言ってしまった僕。

魔王とりぜはお互に見合つてりぜがブツと吹き出し。口もと抑えながら僕に近づいて

「それはねアンジョレッタさん実は……」

「リゼ……」

叫んだと思ったときに魔王はリゼの上着の裾を掴んで必死に言つたと田線で訴えていたがリゼはお構いなく、

「僕がおふやけしてただけですよ。ただカノンくんが焦れつたかったんでね」

「焦れたい？何が？」

聞き返した僕にリゼはそつと耳元でまで近づいて「それは時が教えてくれるでしょう」と囁かれた。

井の音のよひにあたはれた言葉。

リゼが言った”時が教えてくれる”ってそんな未来が見えるような
言い方……。

((((胡散臭つ ! ! ! !))))

私は占いやり迷信やら信じてない。まして未来を言われても信じる
つねだ。」

自然と眉間に皺がよる。

「そんなに睨まなくてもアンジュちゃん」

「別に睨んでませんよ」

「じゃ、ここに皺を寄せなくともいいんじゃない？」

おどけた笑顔で僕の眉間に指でつつぐ。

「眉間に皺を寄せようと寄せなかろうと僕の勝つてでしょ！」
「うーん。」

ふいつと頬を膨らませて言い放つたらリゼは一瞬きょとんとしたが
すぐ表情を元に戻し、

「だつてカノン～ すねちやつた」

「……お前のせいだる。つうか……そういうときだけ俺に振るな

呆れた声で魔王が言った。

まあ僕もほとほと困っていたけどね。

でもリゼは気にせずといふか貴公子的みたいな感じに微笑んでる。

「だつて可愛いからついね

「えつ」

この人アホだろうか？

今の僕を見て可愛いか？どう見ても今の僕の格好は男そのものだ。
多少童顔なのはしかたないけど可愛いとか求めてないし、
きつと頭のネジがはずれている可愛いそうな大人なんだろうと哀れんだ。

「あのー。アンジュちゃん。その目線痛いだけど何かなあ？」

「別に」

こんな痛い大人は本当はほつときたかつたが仕方ない。

ここから追い出すわけにもいかないし、第一に魔王も冷たい目線を送っているのに気がつかないのか……。

哀れりゼ。

そんな哀れんだ空気が占める中、まったく鈍感なりゼに対して魔王が嫌そうに口を開いた。

「ヒーリングなぜつぱお前がヒーリングるんだ？」

「もつともな質問。

僕も気になっていたことだ。だつてこの部屋を魔王が呪文を言つて開けたのだ。

入れるはずがない。

例外があるのか、レベッカは開けてたけど。

「ああそれね～やつてないよ。出来なかつたが正しけどね」

「いやせかに答えたリゼに對して魔王はびくつと顔をひそませ、

「そればどひこひ」とだ?..」

「やだな～。覚えてないの朝の」と

「朝?」

「正確にはアンジューちやんが出て行つた後の話なんだけどね」

リゼは魔王のベッドに座つてくすく笑つてゐる。

魔王はわつぱりだと言わんばかりに首を傾げてゐる。

でもリゼは魔王が思い出すまで返答を待つてゐるようだつた。僕が出てつたあとつていつの話だ。

腕を組んで考へても出でてこない。

「アンジューちやんはわからなこと思つた

「なんで?..」

「だつて魔王が着替えてるときに入つたんだよ」

「あつ確かにそうだ

「へへ。着替えてるって……変態……」

僕はさつと指を指して言つと、リザは手を広げて、H A H A H Aつと笑い声が部屋を響かせる。

「変態つてひどいなあ。僕はれっきとした男の子だよそんな魔王を狙ねつなんてそんなじと」

「じゃなんでそのとき入ったの」

「チャンスが無かつたからねえ。でも、いちでした」

「やつは変態だー！」

僕は絶叫をして思わず近くいた魔王を抱きかかえり、ゼから遠ざかる。

「魔王。こんな変態に近づいちゃ駄目だ！！」

「……アンジュが言ひ「」と思つが」「

「そうそう。本人が言つてるんだから良いじゃない別に」

「良くない！！」

すゞ」に剣幕で言つてしまつたがこんな可愛い子が変態に狙われるの

は少々といふか、かなりと言つが許せない。

すると、抱えられてた魔王がアンジューの顔を小さな手で叩いて、

「大丈夫。この変態はみんな慣れてるから下ろしてくれる?」

「もうもう。つてひどいなあ~」

「酷くない。この研究変態占い師が!~」

つと抱きかかえていたので表情はよく分からぬがなんか魔王もす
ごい形相だったのかなあ。

さすがのリゼも引いていたよ。でも笑顔で絶えてみた所をみるとや
っぱある意味強豪なのかなあ。

うん、変態だけど。

大事かどうかわからないけど、一回言つとく。それにしても気になる
単語もあつたなあ。

なんて考えていたら、リゼが手を上げて。

「で話に戻るけどいい?」

「「うう~」」

うんうんと僕らは頷いて話の修正に入った。

「あの部屋の前でアンジューちゃん待つてたでしょ」

「確かに朝~はんの為に待つてたけど何?」

「実は田の前を通り過ぎてたんだよね~」

彼の言つていいる意味がさっぱりません。
ふふつと笑う笑みがなんだか気味が悪いし。

僕が嫌そうに見つめてやれば、鈍感なのかメンタルが強いのかいまいち謎だが。

リゼは得意そうに立ち上がり、何処に隠していたかわからない小瓶を取り出した田の前に差し出した。

「実はこれを

「興味ない」

「どうでもいい」

これと言つて興味の欠片もなかつたから一刀両断する僕ら。

「ちょっと聞いてくれてもいいじゃない！！」

「リゼ。俺が知りたいのはなぜお前がここにいるのかであつて、どんな方法で入つたかじやないだが」

「でも」

「……」

「カノン！！」

「……」

なんとまあ無言攻撃ですな。
ある意味辛いかも。

地味に……。

リゼは涙ぐんでいるぽい。

効いてるのかな?

意外にメンタル弱かつたなと思いつつ。

その美しい容姿に、黙つて見てる分だけなら本当に美人なのに勿体ないなとも思わせた。魔王も呆れて、

「じゃ簡潔に答えるよ」

リゼは一回いくつと頷いて。

「魔王の部屋に入つて出来たての新作を見せたらキレて閉じ込められた」

「……」

「……」

「あの……カノン? アンジューちゃん?」

決して行為で無言だつた訳じゃない。

呆れてものも言えない。ことわざがあるよつに固まつてしまつたからだ。

「とか……。

この人変態は変態だけど……。

アホつ子の割合が高いだなあつて実感した僕でした。

「……」に閉じ込められた話はいい。俺も悪かったと思つし……」

「カノン……」

「だから抱きつぐのはやめろ……」

はーい！勇者ことアッシュ（アンジュ）です。
今、状況を説明します！

今にも泣きそうだったリゼを魔王が見かねて、僕に「慰めてくるから離してもらえないか？」とお願いされたけどもちろん僕は魔王を離すわけがなかつた。

だつて変態だもん。どんな危害がつて考えただけで……なんかうだつたいことは目に見えてるし。

でも魔王は僕の腕からすり抜け^{（まだ）}てリゼを宥めたいたんだ。
友情心だったんだろうな。

でもそうして今の状況になつたわけですよ。

まあ魔王がいい人だから仕方ないねえ。

それにしてもこうしている一人をみるとリゼは大人に見えない。
まだ魔王の方が上に見える。

見た目逆だけど実際は26歳の男が男に抱きついてるだよなあ。
魔王の本来の姿を見たこと無いからないも言えないけどさ。

（それはそれで見たくない……。といつかレベッカに殺されるんじやないか普通に？）

などと脳裏によぎる。

とこりが本来は止めなきや いけないのかい？？

何キャラ隊長だから。。。って名前すらもひ覚えてないし。
絶対行つたら巻き込まれそุดから行きたくない。

あの空間とても近寄りがたいです。

だつて……

魔王の顔が凄く嫌そうで。

リゼはとても嬉しそうだけビ。

「いい加減にしそうよ」

「いや、離れない！！」

魔王はリゼの額を必死に押して引き離そうとしてるけど無意味ぽい。
子供ですもんねー。不用意には近づけないからせめて助け船でも出
してやるつかあ。

ああなんて僕は親切だろつって馬鹿みたいなことを考えながら、

「あのや。なんか魔王話そうとしてなかつた？」

「ああ……あるが今それどひひぢゅ」

「魔法使えばいいじゃない」

「ああ～！確かに」

ぱつと笑顔に変わつた所を見るどびうやうがなかつたみたい。
つて最強の魔王がこんなでいいのか。

本当余つたときからイメージ像を壊してくれるよ本當。 マジで。

げんなりしながら見守ると、こつ之間にか魔王はリゼから離れてい

てその後どちらとまなく檻がリゼの頭上から降つてきた。

たぶん時間の魔法と物理的なにかだらうが……。

なんか魔王もすつきりした顔してゐるし。

まりリゼウザかつたですもんね。

檻の向こうがちょっとひるさいけど気にしない。気にしない。

まあ魔王が可愛いからもつなんでもいいや。

なんかどうでもよくなつてきましたし。

この1田を通せば誰だつて思うはず。

「で詰なんだな。とても言いづらいかとなんだが……」

「なにや」

「……実はこの同盟を進めてきたのがリゼなんだ

妙な沈黙が流れる。

今魔王がなんて言つたかな……。

なんか僕の耳可笑しなつた氣がするし、あつもしかしたら聞き間違えかもしれないからともう一度尋ねることにした。

「あのもう一度言つてもえないか?そのよく理解できなくて」

「そうだよな……。信じがたいことだが、リゼに同盟を結べと言われたのは事実だ。だから契約を頼んだんだ」

「あの……。この人偉いの?」

思わず指で指してしまつた。

だって全然頭よく見えないし、寧ろバカっぽそつだし。美形だけども。

魔王もあぐねいて、

「偉いと言つか……。」

「いつか？」

「役職は……化学者兼占い師なんだあと認めたくないけど側近」

失せ目がちに答える魔王。

「やつぱアホだろーー」といつか役職真逆じやねのーー。」

「えー！立派な化学占い師だよな！」

「おまえが立派な男だね」

魔王は動じずにリゼに聞くわ、リゼは櫻の中からグッドサインを出した答えわでイライラする。

「何意気投合してんのよーーーーー! リゼはもう立派な職業に就きな
んよ!」

「えりじや占ご師？」

「普通科学の方でしょ！！つかなんでここ魔界なのに科学なんて研究してんのよ！？魔法使えばいいじゃない！！」

行き絶え絶えながらもツツ「ミ」を入れると、リゼは頭をかいて、

「そんないつぺんに言われてもね

魔王と田を合わせてお互に“ねー”っと頷き合つてゐる。
なんですか！？一気に仲良し度上がつてゐるのわ……。

僕、本当疲れるんですけど。

「だつてね。そもそも俺に魔力なんてないし、魔法使えないのに力
ノン守れるわけないじゃん」

「はあ！？？？」

「だから研究して物理的に攻撃できるように日々頑張つてゐんだよ。
これでも」

まるでえつへんつといづばかりに胸を張つてゐる。馬鹿丸出しだ。
なんか話を聞いてると頭が痛くなつてきた。

僕は頭を抱えながら一様気になつたことだけを聞いてみた。

「ちよつと待つて……。魔力ないつてどうにかこと

「えつ俺魔力なしだけどなあ！カノン」

「ああ。間違えなくゼロだ」

「ちよつと待つてよ！？それで側近なわけ！？強くないのに！？」

思わず、荒げた。

だつて、これまで旅して、苦労して、ここまでたどり着いた勇者に
対してかなり失礼じゃないか！？
リゼはクスッと笑つて

「俺そりゃ負けないけど。それなら戦つてみる?」

「望むところだよー。」

「うふうとアソジHーー。」

魔王が止める暇もなく、僕はリゼに向つた。
だつて負ける気がしないし。

ただ魔王が焦つてるのが気になるけど。

「じゃ明後日戦おうじゃないか」

「いいよやつてやうひじやないのーー。」

「ただ勝負したんじゃつまらないから、負けた方は勝つた方の言つ
事聞くつて事でいいよね?」

「いいね。そのほうが盛り上がりそうだし」

リゼと僕は火花を散らして睨み続け。

魔王はオドオドしながら、

「あの……。話終わつてないだけだ」

魔王の声は一人に届いていなかつた。

21話 過去（前書き）

12話を書き直しました。
追加したので、話が見えないかもしません^ ^;
先に読んでもらえると嬉しいです。

それはリゼを追い出した後のこと。

まだ僕は部屋に返してもらえませんでした。
このしーとした空間苦手なんですが……。

魔王に手を合わせると、

「それよつじつするんだ? リゼは強いぞ

魔王は険しい顔をしながら囁く。
もじりん僕はへラツと笑つて、

「大丈夫だよ。あんなやつ僕の剣でイチ口ロセ」

「……難しいと思つた」

勝つ気満々な僕を心配そうな手で訴えいる魔王。

何故さと眉を寄せ聞いたら席に戻つて話すといい魔王はベットに腰
かけて、僕は近くの椅子に座つたがあまり納得出来ない。

(あんなへなむけに何が出来るのぞ)

ちゅつとむくれながら魔王に尋ねた。

「で、何ぞ」

「リゼは化学者と言つただろ? あれは伊達じゃないぞ」

「うん、で?」

あまり聞きたくはないから適当に頷きだが。魔王も気付いてかため息を一つ吐いて続けた。

「アンジュ。ここからよく聞いておけ」

「はいはい」

「油断すると殺されるぞ」

魔王に真剣な目で見られた。

何故そこまで、心配されるかが不思議で僕はキョットンとしてしまう。

「どうして？まあ決闘だからこそそこまでではないでしょう？」

「……奴は二重人格だからな」

「はあ！？もうわけわかんないですけど……」

本当わけわからぬで、眉間にしわが寄ってしまう。

「普段は温和なんだ。アンジュを助けたときもそうだったろう？」

「ああ。たしかに」

思い出しながら頷く。

たしかに会った時は、助けつて貰つたからいい人かと思つたけど、よく考えると原因もアツだし、助言も言動も今考えると変なやつだった。

それに突然怒り出すから、短気もあるのか。

この数分でこれだけ言える人物つてある意味すげいよなつとあきれ

た。

「だが……。リゼは自身に対する弱さを酷く気にしてる。魔力無し
だからな。だからだ、禁句ワードがリゼを否定する言葉例えば”弱
い””へなちょこ”等々だ。まあアンジュは”強くない”だの魔力
ナシをバカにしてたからな。もう一つの人格が出かかってた」

「はあ……」

やる気ない声で、対応してしまつ。
リゼってどんだけ精神弱いんだよ。

さつきだつて泣いてたし。

魔王も僕の気持ちを分かっているみたいで、つっこみはしてこない
けど。

「もう一つの人格は危険だ。そこの所は理解してほしい」

「例えば?過去に何かしたことあるのわけ?」

「ああ。以前もキレることがあつて新開発した剣で爆発事故を起
してる」

表情を変えず、淡々と述べられた言葉には、耳を疑いたくなつた。
普通にアリエナイですけど!!

「はあ！？剣で爆発つて可笑しいだろ」

「それが奴の武器なんだよ。言わば破壊ヲタクとも言おうか。キレ

ると手をつけられないし、この前は城の一部破壊してノアにキレられたからな

「それは地獄絵図だ……」

なんか容易にノアのキレた姿が思い浮かぶ。

昼間見たからな。苦笑が漏れる。

「それより過去には村半壊で、死者は出なかつたが、けが人は50人弱で重体は数人。迷惑な話さ」

「ちょっと魔王！他人事のように話すなよ！仮にも側近の一人でしょ？」

「だ・か・ら・り・ぜ・は・側・近・な・ん・だ。見張るため兼彼を守るためでもある」

魔王が優しい表情に変わつた気がする。

それと今の言葉にどんな意味が込められているか僕にはわからくて首を傾げ、

「どういつ意味？」

「アンジエならわかつてると思つたんだがな。同じハーフとして見てもわからなかつたか？」

はつとした。

なぜ魔王が知つているか、問いただしたかつたが、ぐつと堪える。これでキヤンキヤン吠えるように、話題に噛み付けば、認めてしまつているようなものだ。

「……知らなかつたよ。リゼがハーフなんて、魔力ナシでも気付かなかつた」

「リゼは魔族の血の方が多いからな。気付かれにくいが勘がいいやつは気付くさ。それに小さい頃は魔力ナシで虐められた。まあこれが原因で一重人格が出来たし、被害拡大だし、もうやつてられないよ」

「つて最後！－愚痴かよ！－」

盛大につつこむ。

そらもう、せつかくシリアスチックだつたのに、あんたなにしてんのさー的に。

「いいじゃん別に」

ぶうぶううと魔王は口を尖らせながら言ひ。

そんな姿が……
まあかわいいから許す！－

「しつしかたないな」

ああ。できるなら頭とか撫でたい。なあなんて妄想してると、

「アンジュ。調べさせてもらつたよ。アンジュレッタ・ガーネット」

くすりつと笑う姿は、子どもながらに、魔王の風格を醸し出すには充分だ。

何故だか嫌な予感に変わる。

「なつ何をだよ」

「君のことだ」

藍色の目が止まる。

「契約のときに”あんな”条件出すんだからね。早急に調べたら、いろいろわかつた」

「……そつ。何もかもバレバレってわけだ」

「あの子たちを守るためでしょ？」

そう笑顔で答えられては、反論する気も起きない。
僕も頷いて、

「……そだよ。只でさえ魔族とのハーフで、孤児院出身なのに、魔王と協力する勇者なんてありえないじゃん。裏切ったと思われて、家族が……大切な人が殺されたんじゃ堪つたもんじゃない」

これは本当の気持ちだ。

魔王に協力するための唯一の方法。

誰も傷つかなくていい。

これでもう人質じゃなくなるわけだから。
なんだか、しんみりした空気が漂う。
はつきりいうとこんな空気は嫌いだ。
まず、魔王の表情もくらいしな。

なぜ魔王が僕ことでそう落ち込むのか、別に協力者だからってまだ
1日しか過ぎていないので不思議だ。

でもこんな表情が見たい訳じゃない。

「そんな辛氣くさい顔はやめてよね。これでも元氣にやつていいと
思つてゐるだから…」

「ああ」

「だから～～～！その顔が辛氣くさいと云つてんだ」

僕は椅子から座つたまま、魔王の頬を両側からひつぱりせる。
柔らかく伸びる頬が笑えてしまつ。

「あふんじゅーはなふえ（アンジュー・離せ）」

多少笑えたからいやと僕はほいと手を退ける。
赤くなつた頬を魔王は擦つた。

そんなに強く引っ張つたわけではないからすく引くと想つたが。

「これに懲りたら、もう詮索なんてするなよ。次はテコパンだから
な」

「……意外にしょぼいな」

「どうでも言えよ。殴られるよりはマシだろ？それに今はリゼで
勝つだけを考えてるんだから。ほつといてくれ」

ふんつと顔を背ければ、くすつと笑う声が聞こえてきた。
笑つてゐるのか……。

「まあ。頑張つてアンジュー」

「言わねなくてやるぞ」

まだこの剣術で負けたことないだもの。勝つに行く！心に決めて、明後日の戦いに向けて、意思を固めた。

22話 ルール

雲一つない青い空に、綺麗な緑が広がる草原地帯。いい芝生育つてます……って今はそんなこと語つてゐる場合じゃなくて……

只今から、勝負の時。

目の前にはリゼが居て、隣に魔王、そして審判役としてノアが私たちの丁度真ん中に立っている。

公平に審判を下すのに魔王が選んだから、仕方無いけどとも嫌だ。どうせなら、ちゃんとした審判がいい……なんて口が裂けても言えない。

実力は認めてるけど、変態だから。

そして、変わった人がもう一人。

さつきはあえて言葉にしなかつたけど。

やっぱリスルーできません……

今、ノアがルールの説明してるけど、叫びたい……

『『『なんでおまえは白衣なんだ……』』』

叫びたくてうずうずするくらいに。
だって考えて『ら』よ。

普通は動きやすくて、防御性の高い服を選ぶはず。

なのに、リゼは何故だか白衣を着ている。あとは普通に軽装だ。見る感じ防御力が高い風でもなく。

例えて言つなら初心者が初めて買つた装備くらいのレベルだと見て取れるし、しかも丸腰。

僕をここまでなめてるんだわ!と憤つて、じつ戦つつもりだよつと疑いたくなる。

「あの勇者さん聞いてました？」

「えつ？」

まさか聞かれるとは思ってなかつたから、ノアの問いかけに反応が遅れた。

ノアは、はつと息を吐いて。

「その様子だと聞いてないですな勇者さん？」

「「」めんなさい」

素直に謝つておく。

これから試合なのだからルールを知る必要がある。

知らなくて違反して失格とか、ないもんね。

「今度はちゃんと聞いてくださいね。また一からの説明は面倒ですから簡単に言います」

「うん」

「ルールは絶対に魔法を使わない剣術勝負です。剣・刀・ナイフ等々、刃物ならなんでも使って良くさらに何本使おうが構いません。勝敗は相手に参つた等の降参を認めたり、意識がなくなつたりした時点で、勝敗が付く形式です」

なんともわかりやすい説明。

すつじいあつさりだけどさつきあんなに長かつた説明はどうへいつたのか。

「わかりました勇者さん？ ああもちろん相手を殺したりしてはいけません。あくまでも試合ですからわかつてますねリゼ」

なんだ、 いの言ふ回しはと疑問に思いながら、 目の前のコゼは赤い髪を遊びながらつまらなそり、 元

「わかつてるよ。 気絶ぐらこで、 すませればいいだろ？ アークス？ 本当なら命がけがいいだけだ」

「コゼ」

「はいはい。 アークスに説教食らうのは珍めんめんだ。 久々に出してもらつたんだ。 暴れさせてもなわないと」

何故だがリゼはノアを睨んでから僕に向けてふつと笑う。

「せいいぜい楽しませてもらわないとな、 お嬢さん？」

僕は目を見張る。

今まで会話をしていなかつたからわからなかつたけど、 こないだ会つたときと別人ようだ。

どこがと言われたら、 どうと答えられないけど……。

明らかに殺氣が含まれた目で笑われ、 それに周りの空気が違つ氣がする。

何故だが緊張した。

丸腰の相手なのに悔しい。
悔しいのに……。

「これおこしいな」

「でしょ！頑張つて作つてきたの。でもお兄ちゃんにだからあんまり食べないでよティオ」

「これ、味濃いのよ。大味なのよ」

「文句言つなら食うんじやねー」のトリオー。」

後ろが妙にうるさい。

わかるてるよ。もちろん声の主達を。

見事に僕の緊張感をぶつた切るような事をしてゐるせつらは……レベ
ッカや、ティオ、えつと……名前忘れたけどあの鳥もいるな。
きやつきや、きやつきや聞こえて耳障り、ちらつとだけ様子を伺つ
たが見なきやよかつた。

『 『 『 どこの家族かよ！――』

つてつてじみたくなる。

いや 叫んでもいしかな?

笑顔でティオとか、殴りたいもの。

「アンジュ顔怖いぞ。なんか笑顔なのにオーラ黒い……」

「わかってるね。さすが魔王様！」

「……見ればわかるよ。誰だつて」

魔王がボソッと言つた。

まあいいや、どう言われようと、このイライラは勝負で発散すればいいだから。

いつの間にか、悔しい気持ちも消えてたし、後ろがうるさいけど集中してやればいいことだ。

今も、殺氣を放つアイツを、止めればいいだけなんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161m/>

魔王と勇者の契約

2011年6月19日22時05分発行